あやかし鬼譚

yoshihira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あやかし鬼譚

【Ｎコード】
Ｎ７６９３Ｒ

【作者名】
ｙｏｓｈｉｈｉｒａ

【あらすじ】
五十前で亡くなったミツ婆。
この老婆は巷で名の知れた霊力の持ち主で、アヤカシ退治でその勇名を轟かせた人物だ。しかし、彼女は引き取った鬼子たちの呪を解く為、残り少ない命を使い果たして亡くなる。それから十五年後、ひょんな事に転生した彼女は目覚める。どういうわけか、ミツ婆としての記憶を持ったまま。
彼女の第二の人生が始まろうとしていた。

簡易登場人物紹介（前書き）

１７話時点のものです。
どちらかといえば、自分のための覚書…。

簡易登場人物紹介

登場人物紹介（17話時点）

◇美津（ミツ）

萩の都で活躍していたアヤカシ退治屋。
五十前に亡くなり、十五歳の少女として生まれ変わる。
だが、中身は前世のミツ婆としての記憶を引き継いでいるため、その点、困惑している。

黒髪黒目。小柄。

◇風見（かざみ）

退治屋のミツと出会い、何故か、つきまとうようになった天狗。
正体はアヤカシの一種。
前世では三十年以上、仕事の相棒を務めた。
今生では、ミツに対してセクハラ気味。丁寧な口調の中身は遊び人。

黒髪黒目。二十半ばの外見。実年齢は百歳以上。
精悍な顔立ち。浅黒い肌。一つに縛られた長い黒髪。無駄に色気あり。

◇常磐の山神

萩の常磐山の神木に宿る山神。

姿は見えないが、声は聞ける。その声は会う都度、老若男女のものに変化する。

＞過去編＜

◆ヤシロ

ミツと出会った当初、五歳。鬼の一族の子供。

銀髪緑目。小柄。事件の後遺症で、失語症となる。

◆ダイラ

ミツと出会った当初、七歳。鬼の一族の子供。

黒髪蒼目。腕白坊主。首枷の呪をかけた相手に恨みを持っている。

◆サラシナ

ミツと出会った当初、十歳。鬼の一族の子供。

鳶色の髪真紅の目。事件で、片目を失う。子供たちの中では頭目的存在。

◆トナミ

ミツと出会った当初、十歳。鬼の一族の子供。
黒髪黒目。真面目な性格。自己犠牲心が強い。

◆権兵衛

黄京に店を構える商売人。武器商人。一見、好々爺のようだが曲者。

◆ヨネ

萩のミツの屋敷近くに住む、里の女。夫と三人の子持ち。
アヤカシに襲われた所をミツに助けられ、恩を感じ、屋敷の面倒をみてくれていた。

＞黄京＜

◇葦原の藤永（あしわらのとうえい）

左大臣葦原家の長男。十五歳。
実の兄弟のように育った現天子を慕っている。世渡り上手。

黒髪黒目。少年の割に立派な体格。凛とした顔立ち。

◇貴斗（たかと）

東国を治める、現在の天子。二十歳。
博識で土いじりを好む、おっとりとした見かけの割に芯が強い。
楽天的。
一年前に突如として御所に次期天子として現れた。同じ屋敷で育った藤永を弟として見守る。
先代天子とは出生時の波乱もあり、距離を置いている。

黒髪黒目。線の細い青年。

◇定康（さだやす）

先代天子。五十九歳。
十一歳の時に即位。在位直後、魔の変革が起こり、病弱の身体をおして政務をこなした。
後見役の時峰を信頼している。

◇葦原の時峰（あしわらのときみね）

前左大臣。藤永の祖父。七十二歳。
かつて天子に代わって政務を代行した辣腕な政治家。
他の天子の血族を差し置いて、貴斗を天子として据えた。

白髪黒目。

◇ナガレ

天子に関わる鬼の一族。使役鬼。
首枷の呪に縛られ、貴斗に使役される。

銀髪瑠璃色の目。美形だった。外見は三十路四十路にみえる。

＞萩＜

◇柳瀬（やなせ）

若い天狗。風見と同じ山の出身。
綾瀬（あやせ）という双子の天狗を探している。

◇赤也（あかや）

二十ニ歳。都守が組織した自警団に所属する青年。
墨染めの着流しをだらしなく着る。大刀を手に持っている。
強面だが、中身は意外に純情派？

黒髪黒目。大男。

◇青乃（あおの）

二十五歳。都守が組織した自警団に所属する青年。

派手な羽織を着た歌舞伎者っぽい男。左目に眼帯ををしている。
軽薄な印象だが、中身はしたたか。

黒髪黒目。波打つ長い髪を幅広の布でまとめる。

◇黒斗（くろと）

二十五歳。都守が組織した自警団に所属する青年。
ミツとは黄京で一度会っている。鬼子の成長した姿と思しき青年。
行動は穏やかな見かけによらず、結構強引。

黒髪黒目。上品な面差し。黒髪を一つに結い上げている。

簡易登場人物紹介（後書き）

時々、更新します。。。

01　終焉（前書き）

前触れ無く残酷描写が出てくる事もありますので、ご注意ください。
なんちゃって似非日本が舞台です。

01　終焉

季節は既に次の白の季節を呼び込もうとしていた。

目指す地は険しい山道を徒歩で辿らねば入り込めぬ所にある。
目に映る景色は、遙か遠くより先駆ける冬将軍を迎える準備でわびしくなっており、剥き出しの岩地が白く塗り潰される日も間近だろう。

その雪が解けて、次の春を迎える事は自分にはもうない。
動物は自らの死期を知る事ができるというが、自分は今日という日を自分の命日に決めた。
それは寿命でもあり、自らの意志でもある。

この道の先に待つものを知りながら、老婆は足を進める。

時々、寒いとぼやく。
職業柄、真冬の禊には慣れているが、もうすぐ力尽きようとする年寄りの身にはやはり寒さは堪えるもので。
それでも一歩一歩歩き続れば、ようやく慣れ親しんだ常磐の山神の根城、千の時を越えて生きる大木の根元が見えてきた。

その手前で止まり、大木と比べるまでも小柄な老婆は、礼儀として上がってきた息を整えた。
老齢の為というより、その身に負ってきた代償が恐ろしいほど体力を奪っている。
日頃の老婆をよく知る者ならば、その弱りきった姿に目を疑っただろう。だが、ここには老婆の他に誰もいない。

やれやれと息をつく老女の顔中に刻まれた皺は今までの人生の艱難困苦を物語っているように深かったが、表情は何処か晴れ晴れとしていた。

「…さぁて、もうひと踏ん張りというところか」

呟いて、にっと笑うと、また確かな足取りを取り戻して歩き出す。

白の装束の下に紺の袴という男物の衣服は、見る者が見れば神職の地位にある身分を示すのだとわかる。

だが、老婆はこれが動き易いからという理由でずっと身につけていた。

白んだ長い髪はうなじで一つに結び、これも邪魔にならぬようにしている。

――もうお別れなのかい、ミツ婆

――人はほんにあっと言う間にいなくなってしまう

――さみしいよ

――さみしいなぁ

樹木にひそむ精霊（しょうりょう）たちが名残を惜しんでいた。

「なぁに、またすぐに巡り合えようさ。この世の魂は流転すると決まっておるでな」

口に出してはそう答えながら、分厚い瞼の奥の目を細めて、まぁわしの場合はどうなるかわからんが、と、ひとりごちる。

そうこうしている内に、ようやく両手をまわしても掴みきれない大木の前に立つ事ができた。
山の中でもたった一本だけ、黒々とした濃緑の葉を繁らせたこの見事な大木は、その場にいるだけで跪きたくなるような清々しい威光を放っている。
この地一帯の神域を治める神の根城、常磐山の山神が宿る御神木であった。

ミツは恭しく頭を垂れて礼を取ると、しゃんと背筋を伸ばして向かい合った。

「ご無沙汰しております、常磐の山神よ。萩のミツでございます」

弱っているとは思えぬ張りのある声が届けられる。

「御身に宿る神力を長きに渡りお貸しいただき、誠にありがとうございます。これでようやくあの子らを解放してあげられる」

何処かに向けられたその微笑みはとても優しいものだった。

――よいのか、ミツ

山神が子供のように甲高い声で問うた。

――何度も言うたが、此度の件、お前の今生だけでは購えぬ。その代償として、来世も縛られる事になろうぞ。それでよいのか。

「構いませぬ」

凛とした迷いの無い声だった。

「これがミツの望みでありますれば」

もう思い残す事は無い。

その無言の囁きを聞いたかのように山神はわずか沈黙し、それから彼女に最後の神力を授けた。

――――…！

――――っ！

……

……？

「……ミツ様！」

「おいっ！　クソババァ！　目を開けやがれ！」

聞き慣れた幾つもの声に宿るあまりに悲痛な響きに引き戻されるようにして目を開けた。

ぼやけた視界に感覚の戻らない手足。冷たい地面に横たわってい

るようなのに何も感じない。
魂魄が身体から抜け出ようとしているその狭間にあるのだ。
その体に満ちる静けさに猶予が無い事を悟りながら、それでも精一杯、呼ぶ声に耳をそばだてた。

「クソババァ！　おい！　クソババァ！」

そんな何度も呼ばずとも聞こえておるよ、と、答えようとしてもはや唇は動かなかった。

こんな口の悪い呼び方で自分を呼ぶのはダイラに決まっている。
文字通りの腕白坊主で生意気で、人一倍怒りっぽく、仲間を守ろうと必死に牙を研いでいた小さな戦士。
そんな子供の声は、今にも泣き出しそうなほど切羽詰ったものだった。

時を置いて、少し曇りの払われた視界には愛らしい四つの鬼子たちの顔が見えた。
異端として迫害され、苛酷な扱いも受けながらも逞しく生き延びた、彼女の養い子たち。
短くとも一年近くそばで見守ってきた。
それぞれ表し方は違うものの、子供らの苦しげな感情はすぐに伝わり、ミツはいいんだよと言うように微笑んだ。

下は五から上は十までの幼い子たちだが愚かではない。
自分たちの身の呪縛が解けた事とこの老婆の状態に自然と気が付いてしまったのだろう。
トナミなどは早速、己を責めるような色で瞳を翳らせ、サラシナはいつも浮かべるへらりとした笑みを消している。

こうなる前に、長年の相棒に後始末を頼んでおいたのに、思ったより早くに探し当てられてしまったらしい。
さすが、鬼と呼ばれるだけの異能力者たちの末裔であるというか、聡すぎる。

「莫迦野郎！　死ぬんじゃねぇ！」

おやおや、この子には嫌われていると思っていたんだがね。

でも。

———そいつは無理な話なんだよ、ダイラ。

元々、ミツの寿命はあと一年も残されていなかった。
生涯を通して自分の異能を使い倒してきた代償だったのか。
この鬼子たちにかけられた強大な呪いを解くまでも無く、老い先は短いものだった。

———もう少しお前たちを甘えさせてやりたかったんだが。

心残りは無いとあの時、言い切ったけれど、それはやはり嘘だ。
この幼子たちがどうなるのか、心配でたまらない。年の割りに大人びているとしても、それでもまだ庇護が必要な子供たちなのに。

銀髪の小さな頭を撫でて、面白い昔話を聞かせてたくさん笑わせてやりたかったよ、ヤシロ。

お前がこれからどんなとんでもない悪戯を思い付くか、成長が楽しみだったんだが、ダイラ。

トナミ、お前は人一倍真面目だから心配だよ。ちゃんと自分を大事にするんだよって、もっと説教してやりたかったのに。

サラシナ、片目を失っても笑顔を失わないお前の強さはきっと力になる。その笑顔を失わないでおくれな。

「……っ！」

「……！　……！」

――――あぁ、もう聞こえなくなってきた。

もっとちゃんとそばにいてやれなくてごめんよ。

体に気をつけて、達者に暮らすんだよ――――。

02　再会

まるで漂っていた気泡がぱちんと弾けるように、唐突に彼女の時は動き出した。

――――はて、ここは何処じゃ…？

気が付けば、全く見覚えのない風景の中にいた。

最初に目に飛び込んできたのは、人の手で造られたであろう一本の砂利道だった。

森の木々を掻き分けるかのように伸びたその道は下り坂となって、曲がりくねった先は森の中にもぐっている。

その左右に陣取る黒みを帯びた森も何処のものとも予想がつかない。

ついで、後ろを振り返れば、こちらも意外や意外、続きの森ではなく、長い石段が天へ届けとばかりにそびえていた。

少なくとも尋常の地ではあるまいと感じる。閑散とした、まるで生き物が住んでいないような清らな静けさに満ちた場所だった。

いずれの世に属する相手かわからないが、おそらくは高名な高貴なる御方がおはす御山ではないだろうか。

さて、自分はどうしてここにいるのだったか。

そういえば、もう死んだのではなかったか？

生前の名は、美津と言った。

萩のミツと言えば、それなりに巷で名の知れた退治屋だった。

何の退治屋かというと、化生の類であるアヤカシの、だ。

初めてアヤカシを退治たのはものの道理もわからぬ幼子であった五歳の時。

それから、魔の変革と呼ばれるアヤカシ動乱期が始まり、ミツは退治屋としてアヤカシたちと激戦を繰り広げた。

ミツが居を構える萩の都を含め、かろうじて陸が繋がった三つの島で構成される東国は、七つの都から成り立っている。

中央の一番大きな島には萩を含めた五つの都が、他の二つの島は同じくらいの面積を持ち、それぞれ一つずつ都が置かれている。それが東国だ。

その七つの都を取りまとめる天子が次代へと代替わりを終えたすぐ後だった。

急激にアヤカシが増殖し、人々を襲うようになったのは。

古来よりアヤカシはこの東国の島に存在している。ミツが生まれる以前よりずっと昔からだ。

アヤカシと何時から呼ばれるようになったのか。そして、何処から生まれ出でるのか未だに誰も知る者はいない。

ある者は土から生まれるのだと言い、ある者は風から生まれるのだと主張したが、誰もその真偽を見定めたものはいなかった。

アヤカシは人とは異なる摂理に生きる種の総称だ。

人と関わる事を好まず、アヤカシは自らの持つ不可思議な能力を活かして、人里離れた高所や水中、地中深くの洞穴などに住まうものが大半だった。

中には気まぐれに人里に姿を現わすものもいたが、総じて穏やか

な、ただそこにいるだけのものの筈だった。

その常識は覆される。

凶暴ではなかった、筈だった。

アヤカシは突然、人を食らうようになり、人にとっての天敵にその立ち位置を変じた。

その原因も未だに解明されていないが、人は否が応でもアヤカシと対峙する事となり、自らの身を護るが為に戦わざるを得なかった。

中には怪異を引き起こす知能に長けたアヤカシもいて、一晩のうちに集落が全滅する事もあった。

不可思議のアヤカシには通常の刀や武器はあまり役に立たず、人の身に宿る霊力を秘めた呪が一番効果的だ。

そして、アヤカシは退治してもまた何処からか生まれてくるのだ。

生まれつき、ずば抜けて霊力の高かったミツは期待をかけられ、退治屋として何時終わるとも知れぬ熾烈な戦いに身を投じる事になった。

それから一心不乱に戦い続けて、およそ四十年――――。

ようやく数年前からアヤカシの姿が減り始め、徐々に荒んでいた世が持ち直そうとしていた頃。

ミツに一つの出会いがあった。

生涯の相手も子供も持たず、ただ、血にまみれて生きてきたミツにとって、その出会いは運命の契機とでも言うべき大きなもので。

そして――――。

恐ろしく強大な呪に立ち向かう為に残る霊力全てを投じてもまだ

足りず、神々に購って何とか事を成し、そのまま寿命が尽きて息絶えた。
これがミツの退治屋としての人生の終焉だった。

さてさて。
これから黄泉路を出て、その先に待つ三途の川を渡り、人生の総決算とでも言うべき閻魔大王が裁判に臨むのだと勝手に見当をつけていたのだが。
どうやらいささか勝手が違う。死後の世界というのは、意外にも鄙めいて緑豊かな風土であったらしい。

と、辺りを見回して感心していると、三途の川への案内役だろうか、目の前の砂利道を登ってくる人影がある。
こんな場所に現れるのだ。尋常の存在ではあるまい。
好奇心を刺激されてわくわくと待ち受けていたが、程なく正体がわかり、驚きで思考が真っ白に吹っ飛んだ。

「風見(かざみ)！？」

見間違うわけがない。
本性を隠した人界用の端麗な青年姿であったが、数十年に渡り、連れ添ってきた相棒が何故、こんな所に。

「ミツ様！」
「へっ？」

逃げる暇も無い、突然、両腕を広げて抱き込まれ、背丈の違いで腹の辺りに顔をうずめる事になったミツは鼻を潰され、強制的に口を噤まされる。

「もう二度と会えぬと思っておりました――――」

思いのほか情熱的に抱き締められ、何が何だかわからない。

「か、風見！　ちょ、ちょっと放せ！　息がしにくうてかなわんじゃろが！」

じたばたともがくと風見は腕を緩めてくれたが完全に放す事はせず、何故か、ミツは腕の中に囲い込まれたまま話を続ける事になった。

「これはまた可愛らしくなられて」

にっこりと微笑む風見は、二十歳半ばにみえる若い男のなりをしているが、その正体は人ではない。天狗だ。

天狗は人と異なる時を生き、異なる理を持つアヤカシの一種だ。自在に出し入れできる大きな羽根を背に負っているのが特徴で、その性情は、静謐を好んで人の手の入らぬ場所で静かに暮らすものと、人を化かして愉しむ狐狸と変わらぬ輩とに二分される。

無論、魔の変革が起きた後、その性を変じたものもいるが、総じて　山の長と呼ばれるほど知に優れたアヤカシだ。

この人の青年に身をやつした風見は変わり者の天狗とでも言えばよいのだろうか。

ミツと出会う前は、性悪天狗の一派として、男に化けては女を騙し、女に化けては男を騙し、他人の悲喜こもごもをいたずらに煽って手を叩いていた。
が、退治屋のミツに文字通り叩きのめされた後、何を思ってか、ミツの後を付いて回るようになり、ついには仕事の相棒とまでなった。

小柄なミツがいつも見上げなければならなかったその顔は、彼が一番よく使っていた身軽な若武者のものだ。
腰に太刀こそ佩いていないものの、整った精悍な顔立ちと浅黒い肌は女泣かせの色男と言っても良い見目で、一つに縛られた長い黒髪が艶やかだ。
相変わらず無駄に女以上の色気がある。
身に付けた服の色目こそ地味な濃灰色の袴に紺の上衣でかためているが、都に出れば妙齢の女性が放っておくまい。

「どうしました？」

滅多に見せぬ皮肉の無い笑みで見下ろされ、ミツは苦笑と共に首を振った。
疑いようがない。これは自分のよく知る風見だ。

「まさか、こんな所でそなたに会えるとは思わなんだ。風見も息災なようで何よりじゃ。
ところで、ここは何処か知って――――ってそういえば、わしはもう常世の住人になった筈なんだが――――まさか、風見、お前も死んでしまったんじゃなかろうな！？」

じわじわと思い出してきた前後の状況から、風見がここにいる事の意味を推測し、蒼褪める。

ついさっき臨終の最期を迎え、これからどうなるか知らないが、三途の川に始まる死出の旅路に足を踏み入れた事は確かなのだ。
まさか、風見までもと最悪な想像を巡らせたが、それはあっさりと否定された。

「へぇ、すっかり記憶は飛んでしまっているようですねぇ。とにかく話は道すがらいたしましょう。あまりここに長居するのも居心地がよろしくないですし」

風見の提案に首を傾げる事になったものの、異論は無く、二人は砂利道の方へ、森を下っていく事にしたのだった。

「――――というわけなんです」

一通りの話を聞いたミツはしばらく言葉が出なかった。

これでも半世紀近く生きてきて、その身に宿った霊力の凄まじさから様々な怪異にも巻き込まれ、大抵の事には動じぬ胆力を持っているつもりだったが。
それでも絶句すべき事態だった。

風見がわかりやすく説明してくれた内容はこうだ。

ミツが五十年に満たぬ生涯を終えた後、なんと、即刻、彼女は転生を果たしたのだという。

ミツの魂を宿した女児が誕生の産声を上げたのが死後一年後、だが、生前に神力を借り受けた代償として、その赤子は常磐の山神の祖となる三貴神の内の一人、月之神にお仕えする事が定められていた。

赤子の身で勤めが果たせたかどうか疑問だがそれはさておき、それから十五年間、ミツは月之神に使役され続け、そして、ようやく役目を終えた。

さきほどの石段の先は月之神の御所であり、そして、ミツの手の中に転生後の人生が戻ってきた瞬間でもあった。

常磐の山神を通じて、風見はミツの転生を知り、ついで神の御所まで迎えに来る事を許された。

風見はミツは自由になったのだと言った。

これから神界から下りて、人の世で生きてもよいのだと。

「…さすがのわしもすぐには信じがたい現実じゃが、まぁ、神の采配じゃ。そういったものなんじゃろう」

無理やり自分を納得させるが、なんだか遠い目になる。

つい今しがた終えた人生の記憶も薄れぬ内に来世と呼ぶべき新たな生が始まったのだからそれも無理も無い。

「しかし、どうして前世の記憶が残ったままなんじゃ？　幾ら魂魄は使い回すとしても、普通は忘れてしまうものじゃろう？」

「使役された十五年間の記憶は取り上げられてしまうからでしょうねぇ。それも代償の一つでしょうか。
今後に差し障りがあると判断され、月之神が配慮されたのでしょう」

何故か、目を逸らしたまま風見が答える。
どうやらあまり知りたくない裏の事情がありそうだが、神世の規則だと言われればそういうものかと納得するしかない。

まだ先の見えてこない道を二人、ゆるりと歩きながら、ミツは自分の小さな両手を見やる。
白くてまだ皺もない、まるで昔に戻ったかのような手だ。
それもその筈、ミツの今の身体の年齢は、十五なのだという。
風見が、出会った頃のミツ様よりも幼い感じですねぇ、と、嬉しそうに頭を撫で回すのを容赦なくはたき落とした。

足には草鞋に白い足袋、上の衣は相変わらずの白の合わせだが、使い古したものと違って目に痛いほど白い。
歩く度に緋袴の裾が揺れる。自分の服を選べるようになった若い頃から、目立つのを嫌がって赤を避けていたミツとしては、かなり違和感のある色目だ。
通説では、緋色は魔を祓う色として尊ばれ、神に仕える巫女姿としては常道と言えるのだが、短い溜息が洩れる。
髪もどうやら生前と同じく長いままだ。黒髪に霊力が宿るとされるのも有名な話なので、伸ばされたのだろう。
自分の身から出た錆とはいえ、相手が神様とはいえ、自分の身を他者に好き勝手されていた事については、精神衛生上、深く考えるのをやめておいた。

あれから十五年、経っているのだという。

短くは無い時間が過ぎている。

そして、これがミツの第二の人生の始まりなのだ。

「うーむ、不思議なものじゃ」

「そうですねぇ、でも、私はもう一度ミツ様にお会いできてとても嬉しいですよ。

言いたい事もたくさんありましたし」

ちらりと寄越した双黒の眼差しには明らかな非難が宿っている。

「あんな大事な事を私には一言も無く、勝手に決めて、勝手に動いてしまわれるのですから。私に気付かせないよう巧妙に術の気配まで隠して。

そして、止める暇も無く、たった一人で逝ってしまわれた。――――私がどれほどあなたを恨んだか」

驚いて見上げた横顔は、恨み言を述べているのだとは思えぬ静かなものだった。

それでもその内側に流れる真摯な思いを感じ取って、そんな風に恨まれているとは思っていなかったミツは、ばつの悪い顔をするしかない。

「それは…すまなかった。決してお前を軽んじたわけではないのじゃが、その、刻限も迫っておったし、あの方法しか思いつかなんだでの」

「あなたが私を軽んじたと思っているわけではありません。あなたのその鈍感な所を愛らしいと思う時もありますが、やはり」

憎らしい事ですねぇ、と、半分口の中でぼやく風見は形の良い眉

を思い切りひそめて、渋い顔だ。

「だいたい、あなたの寿命が尽きたのだって、生前、霊力を酷使したのが祟ったのですよ。

自分の器以上の霊力を引き出して、若い身空でアヤカシ退治にのめり込んで。

あなたがあれほど早くに老いたのだってそうです。類稀な美貌をお持ちだったのに、三十路を過ぎた頃にはもう五十過ぎの老婆と変わらぬ有様だったではないですか！

まったく、ミツ様は無茶をしすぎなんです！」

恨み言の次は小言の嵐に突入してしまった。

出会った当初は、あまり他人に頓着するような性格にみえなかったのに。

長年の付き合いがそうさせたのか、この天狗はまるで乳母やのように甲斐甲斐しく、薄手の服で身体を冷やすな、精のつくものを食べろ、など口を出すようになった。

そんなに世話をやかれるほど、自己管理能力が杜撰だという意識はミツにはない。

「とにかくこうやって再び生まれ戻る事ができたんです。ミツ様は人界にて何をしたいですか？」

その問いにミツは目を瞬く。

これから何をするか。

その問いに向かい合ってみれば、すとんと簡単に答えが出た。

だが、今、それを口にすれば、この相棒の機嫌がみるみる内に急降下する事は確実だ。

「そうじゃなぁ、なぁ、風見。久しぶりに何か、旨いものでも食べに行くか」

仕事の合間によく口にしていたように、笑顔で誘いかければ、風見も仕方が無い人だと言うように、表情をほころばせた。

やがて森の終わりも見えてきた。

不安よりも今ここにある奇跡に感謝する事にして、ミツは相棒と肩を並べ、かつての現世に舞い戻ったのだった。

03　現世

東国の中心、天子のおはす都の名を黄京（ききょう）と言う。
位置的にも、団子のように連なる三つの島の中央にあり、その主都を花びらのように四つの都が取り囲むかたちだ。

「おおー！」

その黄京一番の目抜き通りにやって来たミツは興奮露わにきょろきょろと辺りを見回した。

町に活気がある。
当時は、アヤカシの襲来に怯えて、人は家に篭もりがちだった。
状態は改善に向かいつつあったものの、打ち捨てられた家が集落のあちこちに見られ、人々の顔にも不安が色濃く巣食っていたものだが。

十年も経つとこうまで復興するのかという驚嘆がある。

前世においても、あまり主都である黄京には立ち入らず、護りが薄くなりがちな地方の四都にばかり足を運んでいたミツだ。
久々の黄京の姿は殊更鮮やかで、瓦葺きの二階立ての家々が左右に立ち並び、その間を大勢の人々が忙しげに行き交っている。
なかなか華やかな着物をまとう者たちも多く、ミツの緋袴もあまり目を惹かず、様々な色彩に溢れていた。

「これはすごいな、風見！」

素直にはしゃぐミツの姿を、隣に立った風見は微笑ましげに見守

っていた。

「ふふ、お気に召されましたか。それでは私のなじみの店にでも入りましょうか」

そうして、風見が連れてきたのは、入り組んだ路地の裏にある、喧騒の届かない静かな料亭だった。

小さいながらも個室に案内され、ミツは戸惑った面持ちで敷かれた座布団の上に座った。

「ううむ、こんな高そうな所にはあまり縁が無かったから落ち着かぬなぁ。

風見、それにわしには持ち合わせがないのじゃが」

生まれ戻ったばかりなのだから、懐には一切の手持ちが無かった。

「あなたに金を出させるなど露とも思っていませんよ。まったく、妙な所に気を廻すんですから」

風見に呆れた顔をされ、ミツは、しかしなぁと心の中で反論した。

手入れの行き届いた畳を見ても、壁にさりげなく配された花器を見ても、何処を見てもミツが普段から利用している小銭で賄える掛け蕎麦屋とは桁が違う。

まして、退治屋としてアヤカシを追い立て、野宿も当たり前の暮らしに慣れていたミツにとっては、逆に敷居が高く思える場所だ。

間違っても部屋の調度を壊さぬように、と、ミツは肝に銘じた。

「そんなに緊張しないでください。言っておきますけど、あなたの得ていた収入では、この程度の店で食事するくらい安いものでした

よ。
あなたに届けられた貴族からの謝礼だけでも幾らとなったか。ま、大半、あなたは突っ撥ねていましたけどね」
悪戯っぽく笑う様が絵になる男である。
最低限、食うに困らないだけの金銭があれば、後は戦いに必要な呪具や曰く付きの妖物を手元に引き取るために費やして、あっという間に散財していたミツだ。
振り返ってみれば恐ろしい額を使っていたらしい。
どうやら自分の金銭感覚が斜め三十度くらいずれていると知った。
そうこうしている内に、女将らしき上品な着物に身を包んだ三十路過ぎの女が、手づから一通りの膳を運んできた。
風見とは懇意らしく、親しげに言葉を交わし、物慣れた手つきで膳の用意をしていく。
時間としては、日も暮れ出した頃で夕餉の時間には少し早い。おそらくまだ仕出しの時間だったろうに、文句一つ言わず、女将は笑顔で振舞ってくれた。
「風見さんがこんなお若いお嬢さんを連れて来られるなんて意外でしたわぁ。風見さんの娘さんにしては大きいやろうし」
本当に不思議そうに女将が言うので、風見も苦笑いをしている。
「知り合いから預かっている娘なんですよ。地方から出てきたばかりでして。
しばらく京にいると思いますので、どうぞよしなに」
無難な素性が並べられ、ミツもそれに合わせて頭を下げる。

おっとりとした女将はこちらこそと頷いて、しとやかに退室していった。

「そういえば、なんだが」

黙々と食事を終えて、茶を啜りながら持ち出してみる。

「…この、今生のわしにも二親がいるのだろうな」

風見の動きが一時止まり、穏やかに頷く。

「えぇ、おりますね。何処の誰とは私も知らされておりませんが、常磐の山神ならご存知でしょう」

それから二人、茶を啜る音が続いた。

生まれ変わって全て創り変えられても、前世の記憶を引き継ぐ限り、囚われ続けるのか。

———まるで対照的な、ゆめまぼろしにも似た綺麗な思い出が根底にあるなら尚更に。

吹っ切れたと思っていてもやはり何処か割り切れないしこりが残っていたのか。

あまり自分でも触れたくない部分だと自覚しているだけに、苦い。

風見もそれ以上言わない事がその証拠だ。そんなに自分はわかりやすかっただろうかと反省すら湧き起こる。

「いやなに、わしに今生の名前はあるのかと思うてな」

「今生の名前、ですか。それは山神にもお聞きしませんでしたねぇ」

ミツという名は、正確に言えば前世のものだ。
この、今生の姿となる少女の名前ではない。それが気になった。
少し考え込んで、決めた。

「よし、なら風見、お前が決めてくれんか」
「――――え？」

何を言われたのか飲み込めていない風見に、にっと笑いかけた。

「今生の名をお前が決めてくれ。いつまでもミツの名を使い続けるわけにもいかんだろう？」
「…アヤカシに名付けを頼むなんて聞いた事もありませんよ」
「他でもない、わしがお前がいいと決めたんじゃ。何の不都合もなかろう」

これは一つの詫びも含めているのかもしれない。
最期の大仕事を独断でやり遂げ、押し付けるように後を頼んだだけで充分な礼も言わず、逝ってしまった自分からの。
三十年以上も一緒にいたのだ。もしかしたら、この天狗は自分の唯一の家族と呼べる存在なのかもしれない。
何が答えなのか自分でもわからないので、かもしれないとしか言えないが。

これから生涯を通して使い続けていく名前を貰い受けたい。この願いは、ミツの風見への想いそのものだ。

茫然としていた風見は口を隠すように手を押さえ、抑えきれぬものを堪えるように少し俯いた。
その耳朶が微かに色づいて染まっていた。

「わ、かりました。お受けいたしましょう」

ただし、少々お時間をいただきますけどね、と告げて、風見はミツに微笑みかけたのだった。

04　鬼子

「どうじゃ、買わんか」

そんな言葉と共に萩の都にある居を訪ねてきたその翁は、同じ業界に身を置く者、広い意味での同業者に入るだろう。

ミツはこの曲者爺が気に食わなかった。

見た目が庭で犬でも愛でていそうな好々爺であるのに、その中身はえげつない事も平然と笑ってこなす、肝煎りの商売人だ。

アヤカシの退治屋からはある意味、重宝される武器商人でもあるのだが、問題はその商品にある。

値段もさる事ながら、下手をすれば買い手の命を脅かすいわく付きの一品でも平気で売りつけてくるのだ。

何も知らずに怨霊の宿る妖刀を買った客が取り殺され、一層邪気の濃くなった妖刀を再び回収し、また顔色一つ変えずに店頭に並べる。

そんな曲者爺だ。

当人は売る相手をちゃんと選んでいると言う。

人がものを考えるように、どういうわけか意思を宿した商売道具のために、良きように取り計らっている、と。

つまり妖刀が人を斬りたいと願えばその通りに、という事らしい。

各地を廻る退治屋稼業も一段落し、久しぶりに戻ってきた我が家で骨休めをしていたのだ。

何を好んで、こんな剣呑な爺と関わり合いになりたいものか。

玄関口ではなく、勝手に屋敷の横手にあるミツの畑にまで入り込

んできた権兵衛に、ほっかむりをしたままミツは年季の入った鋭い眼光を向けた。

「お前からは一切、何も買わんと前に言わなんだか」

鍬を片手にじろりと睨むが、翁は何も感じる様子が無く、ただ笑う。

「まぁ、待て待て。お前が興味を持ちそうだと思って、わざわざここまで来たのだ。追い返すのは商品を見てからでも遅くはあるまい？」

きっとこの、田舎そのものの長閑な空気を脅かす血生臭いものを持ち込んできたのだろう。

げんなりしたが、遠く離れた黄京に店を構える権兵衛が何の気まぐれでか、ここまでやって来たのだ。それ相応の理由があるに違いない。

「茶など出さんぞ」

と冷たく言い捨てて、ミツは商品があるという屋敷の表へと、しばらく死にそうにもない元気な翁の足取りを追っていった。

ミツの屋敷の前には、貴人が好んで使う牛車を馬に挿げ替えた二

台の馬車が待っていた。
おっとりとした牛車に比べて馬車は速度に勝るが、その分、繊細な生き物なので扱いが難しい。車の強度の問題もある。
だが、この商売人にとって実用に耐えうる馬車を手に入れる事など朝飯前なのだろう。

これは近隣の集落でさぞ目立った事だろうと渋い顔をするミツの前で、合図を受け、粗末な方の馬車の傍で控えていた権兵衛の下人が馬車の背後に廻り込んだ。
幌の中から運び出されてきた「商品」が何であるか知ったミツの皺深い顔が、みるみるうちに鬼の形相に変じる。

「――――これが商品じゃと？」

強烈な怒りにさらされながらも、権兵衛はほほほほと単調に笑うばかり。

「そうじゃ、気に入ったろう？」
「たわけ！」

抜け抜けと嘯く爺に、凄まじい怒号が飛ぶ。

「ふざけるな。子供ではないか！」

ついに外道な人買いにまで成り下がったか。

この時代、人買いは珍しくも無い。
飢えた百姓一家が食いぶちを減らすために子を遊郭に売る事はままあった。

だが、この場合はわけが違う。
紐で繋がれてもいないのに逃げ出す様子も無い、虚ろな子供たちの姿を見て、ミツはその出自を悟っていた。

黒髪と黒目。この東国の大多数が占める色合いの中で、異質に映るその色合わせ。
ゆえに彼らは「鬼」と呼ばれ、人々から恐れられ、迫害された。
またその身が持つ、アヤカシに準じるその異能に利を見出し、権力者が飼い殺しにする事もままあった。

この四人の子供たちは鬼子だ。
まだ本当に幼いというのに、希望の欠片もその目には映らないようだった。

「何という…」

あまりにも哀れな姿に声を失い、ミツはよろよろと近付いた。
親元から離されて酷い扱いを受けてきたのだろう。四人とも男で、髪は元の色がわからぬほど汚れ、服装は腰を覆う布一枚という有様。
一人の子の片目は潰されたまま手当ても受けていないのか、赤い膿が零れていた。
そばに寄ったミツに目を向ける事すらなく闇に囚われている。

生きているのが不思議なほど、疲れ果てて全てを諦めきった様子に、またミツの中で熱くどろりとした熔炉の如き、灼熱の怒りがもたげてきた。

その目が彼らの首に廻らされた赤黒い鎖を見つけ、はっと息を呑む。
ミツのような、相当の霊能力者にしか見えぬであろう、その邪悪

な呪は――――まさか。

「お気に召したようだな」

「…くそ爺」

低い低い声でミツは呪った。

「さてどうする、買うか、買わぬか」

「買う」

この子供たちは一刻も早く手当てを受ける必要がある。

人の命を金で買うなんて、などと偽善を吐くつもりもない。金銭の取引でそれが叶うのなら話が早い方がいい。

ミツの決断は素早かった。

「ほほほ、良い返事じゃ」

権兵衛は良い買い手が見つかったと喜ぶ素振りもなく、ひとりごちた。

05　呪

つい先刻終えた仕事の報酬から破格の金額を支払って権兵衛を追い払うと、ミツはその年と小柄な身体に見合わぬ腕力で二人ずつ子供を抱え上げ、まず井戸のそばへと連れて行った。
虚ろな目から変わらぬ子供もいたが、触れる時に、砥いだ刃の如き強い光を浮かべる眼があった事に内心ほっとした。
まだ、完全に心が死んでいるわけではなかったらしい。それはとても眩しい事だ。

このミツの屋敷は集落から離れている。
万が一のアヤカシからの報復に備えて、人里からは距離を置いているのだ。だが、自分一人ならどうにでもなるが、どう考えても子供たちの世話をするのに人手がいる。
仕事の相棒である天狗は、常磐山に隣接する住まいである山岳に帰っているしなぁ、と、ぼやいた。

ともかく出来る事をしておくか、と、屋敷にあるありったけの布を用意すると、ミツは汚れた子供たちを洗い、清める事にした。
幸いにも陽気続きで空気は暖かい。水浴びするのに風邪を引く事はないだろう。

地面に下ろした子供たちは座り込んでいるが、やはり無反応なまま動かない。
まるで、手足に操り糸を結べばそのまま思いのままに動く人形のようだ。
ミツは大きく息を吐いた。
「さて、聞こえているかわからんが、言うておく。

わしはお前たちに危害を加えるつもりはない。ま、無礼は働くだろうがね」

にっと笑い、手を伸ばす。

と、一人の子供が蒼い目をぎらつかせて抵抗するように身じろぎし、だが次の瞬間、物も言わずにくずおれた。

喉を掻き毟るようにする子供の首を注視すれば、絡まっていた赤黒い鎖が警告するように光を強くし、じりじりと肌におぞましく食い込んでいるではないか。

「いかん！」

ミツは指先に霊力を宿すと、鎖に干渉しようと手をかざした。

が、それはなんと強大な束縛の呪である事か。

額に汗を掻きながら、かろうじて抑えつけられたが、鎖はまだ蠢こうと震え、それから十分もしてようやく静まった。

おそらくは絶対的な束縛と支配の呪、首枷。

この呪を受けた者は、主と定められた者の命令に絶対に逆う事は許されず、服従を強いられる。おそらく呼吸すら自由にならない生が待っている。

権力者が鬼を飼い殺す際にかける、ただただ無残な魔性の呪だ。

話には聞いていたが、これほどまでの力を持つとは。

術者は退治屋でも破格と名の知られた自分以上の実力者、もしくは、神々の、主に邪神と呼ばれる禁忌の存在の力を行使しているに違いない。

垂れた瞼の奥で、じっとミツは考え込んだ。
術の性質から、どうやら次の主となったミツが命じなければ、子供たちは言葉を発する事も、自分で歩く事すら出来ないらしい。
確実に名を縛られているとみた。

それならば。

「禊より、こちらが先か。早くせんと日が暮れてしまうわ」

ぐったりしている子供を見やり、ミツは屋敷の中へ一度戻った。

それから一振りの刀を手に取り、また子供たちの前に立った。
鞘に収められたそれは、一見、何の変哲も無い何処にでもある刀にみえる。
柄糸は黒、鞘のこしらえも漆黒。それでいて、抜き放たれた刀身の印象は突き抜けるような白。
銀地に奔る刃紋は優美な弧を描き、この老婆の手にあれば一際、輝く。

懇意にしている常磐山の山神から借り受けた、神の御業をもって鍛えられた神剣なのだ。
ミツを取り巻く空気も、さっきまで畑を耕していた作務衣姿の老女と同じ人物とは思えないまでに、改まっている。

おそらく、この神剣をもってしても、この鎖を断つ事は難しい。

ふと瞼を下ろすと、始めた。

「我、勧請、奉る、疾く、乞い願う、東に知るは木、南に出ずるは火、西に打つは金、北に溢るるは水」

神剣に宿る霊力が身の内に注ぎ込まれるのを感じる。
それは轟々と音がするほど猛り、荒れ狂い、器となった己から溢れ出んとする。
老いさらばえた身にはいささか辛いが、ミツは気丈に笑みを浮かべた。

かっと目を見開く。

白き炎の如し霊力が宿り、二つの眼が銀色に変化する。
その目で見据えれば、首枷の術式が複雑な一枚の黒い陣を浮かび上がらせた。
それは、布に鏤められる綾錦の紋様のようにもみえたが、そんな美しいものではない。
呪の要となる幾つかの起点を見出すと、ミツは次の段階へ移った。

――――頼む、もう少しもってくれよ。

力が搾り取られていく感覚に眩暈を覚えながらも、術式に干渉するため、ミツは片方の手で素早く印を切る。
その口から低い歌声めいた呪が延々と途切れる事無く続けられ――――握られた拳がゆっくりと開かれると、その手に宿っていた白の光が筋となって、それぞれ子供たちの首に宿り、赤黒い鎖を銀色に染め替えた。

「我、ここに宣言す、終(つい)を迎えん事を――――…はぁ、やれやれ」

神剣を元通り鞘に収め直すと、力を根こそぎ奪われて体は悲鳴を上げていたが、ミツはそれでも出せた結果に満足して、にんまりと笑った。

子供たちも何かが変わったと感じたのか、まだ、力なく動かないものの、何処か怪訝にしている気配がある。

「さ、日が落ちない内に禊をして、それから傷の手当じゃ。…ううむ、忙しくなりそうじゃな」

――この鬼子たちの登場で、長く一人で生きてきたミツ自身、思い描いた事もなかった暮らしが始まるのだ。

06　子供

日暮れ時、屋敷の表口である引き戸ががらがらと鳴った。

「こんにちはぁ、ミツばっさま～、生きておいでですかぁ～？」

「まだ死んでおらんわ！」

憎まれ口を返しながらも、見るからに元気溌溂とした客の姿に、ミツの顔も自然とほころんだ。

「よく来てくれたなぁ、ヨネ」

「こっれくらいなんって事ないですよぅ。とりあえず、うちんとこの小坊主たちの着物を持ってきましたが、これで大丈夫ですかね？」

充分じゃと頷いて、ミツは屋敷の奥へとヨネを招き入れた。

ヨネはミツの屋敷から一番近い集落に住んでいる村の女だ。

夫も子供もいるが、アヤカシに襲われていた所を偶然、ミツが助けてから、面倒見の良いヨネは何くれとなく屋敷の面倒まで見てくれるようになった。

村人たちもミツの退治屋としての実力を承知しているので、たまに村で採れる野菜を届けたりしてくれたりと、若い頃はともかく、年老いた今となっては、屋敷での生活も穏やかなばかりだ。

折り紙で作った使役に（ヨネが小鳥がいいと言うので小鳥にした）記した言伝を受けて、ヨネは頼んだ荷物と食料を持ってここまで出向いてくれた。

「そんで一体、どうしたんですかぁ？　子供着が必要だなんて。ば

っさまがぽろんと子を産んだってわけじゃないですよねぇ？」
「ばか者、わしがこの年で産めるか！　…なに、ちょいと知人から子供を預かる事になってな」

これは一つの賭けだ。

ヨネの温かな人柄と母親としての度量を見込んで、ミツは四人の子供たちを寝かせてある一室に連れて行った。

「ま！　まぁ！　これは！」

畳の上に寝かせた子供たちはミツに磨かれて、手当ても受けて、見違えるように改まった。

どれも十を満たぬかという年頃の子供たちで、栄養も足りていないのか、腕も足も一回り細い。

一番小さいのは銀髪の男の子だ。
目は深い森の緑で、光が戻ればさぞかし美しい子になるだろう、綺麗な顔立ちをしている。
話せるようになっている筈だが、まだ一度も口を開かない事が気になっていた。

あとの三人はおそらく二つか三つの年齢のばらつきはあるだろうが、体格的にはそう変わらない。
背丈もミツより少し足らないくらいだ。
一人は黒髪に蒼い目の子。荒削りながら彫りが深い顔立ちで、全身から滲み出る荒ぶる魂が夏の嵐を思わせた。
禊の時も手当ての時も燃えるような眼差しで睨み、唇を切れるほど噛み締めて耐えていた。

口が聞けるようになってからは、何度、クソばばあと噛み付かれたか、数え切れない。

あとの二人は比較的、落ち着いてみえる子供だった。

一人は鳶色の髪をして、刃物で抉られただろう左目と対になる右目は真紅の色だった。

ただ黙ってこちらのする事を見守り、慎重に状況を見極めようと考え込んでいる様子をみせる。

暴れる蒼い目の少年を目で黙らせた事といい、おそらくは子供たちの長にあたるのだろう。

もう一人は黒髪に黒い瞳を持っていたが、やはり鬼子だと思われる。

静かな少年だが、その漆黒の眼差しを覗き込めば、不屈の精神が透かしみえるかのようだった。

こちらとの距離を測りつつ、他の子供を護るためならば牙を剥くに違いない。小さくとも覚悟を決めた戦士の目をしていた。

口を手で覆って言葉を失うヨネを祈るような気持ちで見守った。

「な、なんてひどい！　嫌ですよぅ、ばっさま！」

顔を背けて泣き出してしまったヨネに、やはり忌み嫌われている鬼子を受け入れるのは無理だったかとミツは消沈した。

が、それは早合点だった。

「こんなっ、一体、誰がこんなひどい事を！　みんな、傷だらけじゃないですかぁ！」

「ヨネ…」

子供たちの惨状に胸を痛めるヨネの姿は、じんわりと目元を熱くさせるほど嬉しいものだった。

「面倒をかけてすまないが、助けてやってくれないか？　どうもわしだけじゃどうしたらよいかわからんでなぁ」

「もちろんですよ！　じゃあ、早速、腕を振るいましょうかね！　ばっさまもまだ何も食べてないんじゃないですかぁ？　駄目ですよぅ！　また水しか口に入れてないんじゃないでしょうねぇ～？」

「うっ…いや、今はアヤカシと戦うわけでもなし、そんなに腹は空いておらんからの…」

「駄目です！　毎日ごはん食べないと倒れちゃいますよぅ！　明日から毎日、様子を見に来ますからねぇ…！」

母は強しというか、その気迫に腰が引けつつも礼を呟くと、ミツは頼もしい助っ人の存在に感謝を込めて、もう一度、深く頭を下げた。

夕餉を人数分つくり、子供たちそれぞれの服が身体に合っているかざっと見極めると、ヨネは日が完全に暮れる前に帰った。

最近、この近辺ではアヤカシは見かけないという話だったが、用心するに越した事は無い。

灯りに火を入れて、ぼんやりとした光に照らし出された室内では、各自の前におむすびが幾つも並んでいる。
それと、ろくなものを食っていないだろう子供たちの弱った胃のために、薄い粥もこしらえてもらった。
季節は春を迎えたばかりで夜は肌寒いだろうと、埃まみれの火鉢にも久しぶりに炭を落として火を入れた。

あの天狗以外と、こうして家で飯を食べるなぞ何年振りの事だろうか。

「食べられるならお食べ。でなけりゃ、ここから逃げ出す事もできないよ」

ヨネに厳命されたミツも薄味の粥を匙で掬った。
相変わらずヨネの料理の腕は一級品だと、しみじみと味わっていると、空腹に耐えかねたのか、ようやく器に手を伸ばす気配があった。

一番年長と思われる片目の少年が、無言で器に口をつける。
こくりと喉を鳴らして粥を飲んだ。
それを見守っていた他の三人も続いて食べ始める。

難儀な事だとミツは壁に背を預けたまま、目を細めてその光景を見ていた。

初め警戒して恐々と口をつけているようだったが、それ以上に体が求めていたのだろう、あっという間に大きな鍋を空にした。
黒髪の少年だけが最後までがつがつとせずにいたが、その匙を進める速度は恐るべきものだった。

空になった鍋と器を重ねると、ミツは、隣に寝間がしつらえてあるよと伝え、洗い場へと足を向けた。

片づけを終えて戻ってこれば、子供たちはちゃんと寝床に横たわり、既にぐっすりと寝付いていた。

気配を殺してその様子を確かめると、ミツは何とも言えぬ快い気分になって、火の始末をしてそのまま寝た。

あくる朝、日の出と同時に起き出したミツは身支度を済ませると、さてどうなった事やらと子供たちの寝間へと顔を出した。

既に気配を探ってわかっていた事だが、子供たちは夜の間に逃げ出す事はなかったらしい。

井戸で顔を洗っておいでと言いつけると、ミツは朝餉の支度に取り掛かった。

ヨネが作り置きしてくれた汁ものを温め直して、また、冷や飯のおにぎりを並べるだけだが、ミツ一人の事を思えばかなり手間のかかったものだ。

前と同じ室にそれぞれの朝餉を取り分けると、子供たちは昨日と同じように大人しく座り、ミツのお食べの一言で食べ出した。

子供たちはどうやらきちんとした礼儀を心得た育ちをしているらしい。

それは、年長者に従う姿勢からも、食事の作法からも、寝間の布団がきちんと畳まれていた事からもよくわかる。

朝餉を終えて、それぞれに茶を振舞うと、ミツは何処から話をしようかと少し悩んだ。

「まぁ、何はともあれ、まずは自己紹介といこうか。わしはミツという。ここは萩の都の外れ、わしの屋敷じゃ。
基本的にヨネともう一人と言ってよいかわからんが、その者以外、この屋敷にわしの断りなく立ち入れる者はおらん。結界を張ってあるからの。
留守をする事が多いせいで多少手入れは疎かになってはいるが、まぁ部屋数だけはある。したいように過ごせばいい」

あまり表情の変わらない子供たちを見渡せば、奇妙な沈黙だけが伝わってくる。
敵意もあるが、それよりも戸惑いが大きいだろうか。突然、見知らぬ老婆から言われた内容に頭がまだ追いついていないのだろう。

「それから伝えねばならん事がある」

そのミツの声に何を聞き取ったか、子供たちの肩がぎゅっと強張る。

「お前たちにかけられていた呪の事だ。何の呪か、お前たちは理解しているな？
昨日、神剣から神の威を借りて、わしは呪の改変を行った」

「…この、銀に変わった首枷の事ですか」

自分たちの将来に関わる事だ。気になったのだろう、片目の少年が尋ねてきた。

「あぁ、お前たちの目にも映っているんだねぇ。そう、それの事じゃ。
このわしの力をもってしても解呪は出来なんだが、呪の理を曲げ

てやる事くらいはできる」

代償を支払うなら別じゃが、と、ミツは心の内で呟いた。

「主の命令に背いても命を奪わぬように、な。その鎖の制裁はもう動かぬ筈じゃ。

条件を付与してある程度、誤魔化した。ちなみに主はわしじゃが、わしからお前たちに命ずる事は一つだけじゃ」

一人一人の小さな顔を見て、告げる。

「己の心のまま、囚われずに生きよ。それだけじゃ」

07　遡逆

腹も満たされて人心地がつき、また二人は都をぞろ歩きする事にした。

夜風が出て少し肌寒くなったものの、軒下には提灯が並び、通りはまだまだ賑わっている。

食事処は元より、一風変わった見世物小屋が集まる一角は盛況だった。風見は連れて行ってはくれなかったが、夜が本領発揮となる花街の大門のそばも通った。

――――気のせいか…？

昼間は町の様子に夢中になって人の目など気にする余地もなかったが、どういうわけか、人の視線が多く自分に向けられているような気がする。

巫女の装束を着ているせいか。それ以外、他の町娘と違う点はないだろうと思うのだが。

もしかしたら髪を結わずに下ろしているせいかもしれない。

害のあるものではないようなので、ミツはそのまま頓着せずに風見の横を歩いていた。

――――その視線のほとんどが男のものだと気付いているのは風見だけだった。

今宵はこのまま宿に向かいましょうと風見が言い、ミツはそれに異論がある筈も無い。

黄京をよく知る相棒に導かれるまま、何本か交差する通りを渡っ

た。

他の通りに比べて提灯が少なくなった。

そう思ったのと同時に後を付いてきていた足音が急に音高くなり、どうみてもならず者としか思えない、着物の着崩れが目立つ男たちが暗がりからばらばらと出てきた。

「――なんじゃこれは、風見」

「何でしょうねぇ」

ざっと数えて五人、ミツは半眼で相棒を見やる。

人の町での遊興が好きなこの男は、どの町でも必ずと言ってよいほど、男の恨みを買ってはこうして闇討ちに遭うのが常だった。

不思議な事に、女から恨みや妄執を受ける事はないようだ。

「お前の厄介事にわしを巻き込むんじゃない」

「つれない事をおっしゃりますねぇ。長年連れ添った連理の一対だというのに」

「お前と夫婦になった覚えは無いわ！」

がうと唸ると、風見はやけに爽やかに笑う。

ミツ様は離れて見物でもしていてください、と余裕綽々で言われ、呆れたやつだと白い目で見送りつつ、ミツは言われた通りに壁に寄った。

笑みを絶やさぬまま、風見は男どもの相手をしている。

ただの人ならば十人詰め掛けようとも天狗の相手にはならぬだろう。

その時、夜闇を切り裂くように鋭い笛の音が響き渡った。

「アヤカシだ！　アヤカシが出たぞ――――！！！」

――――アヤカシじゃと！？

こんな町中にまだ出るのか。

愕然としたミツは、次の瞬間、地を蹴って走り出していた。

「ミツ様！」

呼び止める風見の声も振り切って、体中を針にしてアヤカシの気配を探り、通りを駆け抜けた。

人が逃げ出してくる波に逆らい、悲鳴が聞こえる方へと走り続ければ、そんなに遠くはなかったらしい、ほどなく真新しい血臭が漂う場に行き当たった。

「牛鬼…！」

通りに転がった提灯から燃える火に照らし出されたその姿は、頭部に角を持つ一つ目の牛で胴体が八本の足を持つ蜘蛛というおぞましいものだ。

アヤカシの中でも特に凶暴で血を好む部類に入る。その牙には毒も仕込まれており、小さな村一つがあっという間に壊滅した事もあった。

動きはそんなに素早くはないので、首を胴から切り落としてやれば済むのだが、手元に神剣が無い事が悔やまれた。

牛鬼は一人目の犠牲者を屠り、前足で口の中に引き込み、食餌の真っ最中だった。

咀嚼する音が生々しく耳に届き、むせ返るような血の臭いが強くなる。止められなかった惨劇から目を逸らさず睨み据え、構えた右手で印を結んだ。
武器はないとしても、退治屋として培った知識と技は忘れる筈が無い。
幸い、今生の身にも霊力は宿っていた。霊力を糧とする火を生み出し燃やし尽くしてくれよう、と、足を一歩前に出した。

「な…っ！」

――――唐突に腕を引かれて、まったくの不意打ちに足は自分の身を支えきれなかった。
くずおれそうになるところを、すかさず伸びたもう一本の力強い腕が抱き寄せる。

予想外の横槍を気取る事ができず、感覚が鈍ったのかと焦りながら、逃れようと身をよじる。
が、一層強く懐に抱き込まれて、顔が相手の胸元に押し付けられた。

――――窒息させる気か！？

体格からいっても男である事は間違いない。
風見ではない。しかし、何処か覚えのあるような、懐かしい気を感じて、ミツは戸惑った。
しかし、後ろには野放しとなっている牛鬼がいるのだ。悠長にしている場合ではない。

再び抜け出そうと抵抗を始めたミツの頭に、今度はなだめるように手が置かれた。

「じっとしていて下さい。すぐに片はつきますから」

穏やかで落ち着いた声音だった。聞き覚えは無い。

窒息させるつもりかと思った力もすぐに緩められ、ふわりと包み込むようなものに変わっている。

どうやら気遣われているらしいと悟って、ミツは困惑した。

つまりはアヤカシに怯えて逃げ惑っていた少女とでも思われているのだろう。

青年は腰に太刀を佩いており、ミツを保護しながらも、アヤカシに注がれた注意は逸らされる事が無い。

ようようと仰いだ横顔は、薄明かりの中でも、目元涼しげな生真面目そうな顔つきをした青年のものだとわかった。

年の頃は二十歳半ばを越えないかという若さで、見事な黒髪を高く結い上げている。

黙って見上げているミツに気づくと、幼子を安心させるようなひどく柔らかな笑みを浮かべ、そっと手で目を隠してきた。

「見ない方がいいですよ。夢に見たくはないでしょう？」

言葉はまるきり頑是無い子供に向けるそれだ。

と、意識を取られていた間に、新たな人物が登場する気配があり、ついで牛鬼の奇妙に短い悲鳴が響き、重たいものが地に打ち付けられる鈍い音が続いた。

「ほら、終わりました」

目の前の青年がまるで何事も起きていなかったのように、静かに答える。

「あなたの迎えも来たようですね」

さようなら、お嬢さん。

その短い挨拶と共に、優しく身体を反転されて来た道に戻される。

茫然としたままだったミツは、駆けつけてくる風見の姿に我に返り、慌てて振り返った時にはもうそこには誰の姿も見つける事ができなかった。

ただ、予想通り、一太刀で落とされたのだろう牛鬼の首が宙を恨めしげに睨んで、その場に転がるばかりだった――――。

08　暗雲

ミツは怒っていた。

波風立った感情のままに、せかせかと足を動かす。

背には少しずつ遠ざかっていく黄京の都があり、空は青く澄んでいる。

緑豊かな街道のそばを流れるせせらぎにも癒やされる事はなく、しかめ面で一人歩く。

風見はその後ろをのんびりと歩いていた。

背丈と共に歩幅も当然、大きくなるので、ミツが五歩で進むところを風見は三歩もかけずに追いついてしまう。

それも腹立たしい。

実年齢は前世のミツのおよそ倍、百年以上も優に生きた天狗だ。

千も生きると伝えられるアヤカシの中では若輩者だが、自分よりも遙かに長く現世にいるというのに、この手に負えぬ気儘ぶりは何なのだ。

アヤカシはやはり精神的な年の取り方が違うのか。

いや、それにしても我慢がならん。

さきほどからそんな埒の無い問答をぐるぐると繰り返す事になった始まりは昨晩にまで遡る。

人が集まる前にアヤカシの襲撃現場から二人は離れ、予定通り、一夜の宿を求めて、暖簾をくぐった。

宿を探すには遅い時間だったが、幸いにもすんなり一部屋を取る

事が出来た。
ちなみに、男女で一部屋取る事の言い訳に、風見はミツの事を親戚の子だと称していた。
男子でさえ十三で一人前と認められる時代だ。十五といえばもう嫁いでいてもおかしくは無い年頃となる。
だが、憤懣やるかたない事に、小柄なミツはどう見繕っても、十ほどの幼子にしか外見は見えぬのだという。
さきほどアヤカシからミツを庇った青年が、年端もいかぬ子供扱いをしたのは、そういう事であったのだ。

「どういう事じゃ、風見」

あてがわれた部屋に入ったとたん、無邪気な子供姿を脱ぎ捨てて、ミツはぎろりと眦を険しくする。

「あれから十五年経ったという。それなのに、何故まだこんな町中にアヤカシが出るんじゃ。
風見、どうしてその事を黙っておった？」

昼間に都の様子を聞いても、欠片もアヤカシの話は出なかった。
だから、愚かしくも勘違いしてしまったのだ。もうアヤカシの脅威はこの国から去ったのだと。

「ミツ様がアヤカシの事となるとそんな風に目くじら立ててしまうからですよ」

そんなミツを軽くいなすように、風見は肩を竦めてみせる。

「…風見」

「そんな恐いお顔をせずとも、ちゃんとお話しますよ。あまり町中で不穏な話題を持ち出したくなかっただけです。
あなたの嬉しそうな顔を曇らせたくなかっただけですよ？」

そんな風に言われては怒る事など出来なくなってしまう。
女の扱いに慣れた男そのもののあしらいに、ミツは軽く脱力した。

「そうですねぇ、ミツ様がこの世を去られてのち、アヤカシは驚くほど姿を見せなくなったのは本当です。
当時も徐々にアヤカシの襲撃が減りつつあったのはご存知でしょう？　おかげで都は何とか持ち直し、今日に続いています。
昨今では、外海の向こうから外つ国よりの使者も訪れるほどですし。――――ですが」

夜風を入れるために細く開けた障子の窓の外に視線を送り、天狗は皮肉気に片眉を持ち上げてみせる。

「この半年余りの事でしょうか。また再び、アヤカシが舞い戻ってきたのですよ。
こうして町中にまで現れる事はありませんでしたが、今後はそれもどうなる事やら」
「アヤカシが戻ってきた…？」
「えぇ、死期の近付いた天子の代替わりが囁かれるようになってほどなくして、ね」

その意味深な一言に息を呑み、ミツは警戒して素早く辺りに気を張り巡らせた。

「滅多な事を口にするものではないわ。…今のところ確証はなかろう」

諌めつつもミツの表情は暗く翳る。
薄々は感づいていたが、やはり、そうなのか。
代々この東国を治める天子とアヤカシの間には何らかの関係性があるというのか。だとしたらそれはどんなものか。
現人神にも喩えられる至高の存在に拭いようもない不吉な影が滲んでいる。それに気づかないミツではなかった。

「それとじゃ」

気を取り直して、また再び、ミツは厳めしい顔つきに戻る。

「わしはお前に後を頼むと言った。それには、わしの養い子たちの面倒をみる事も含まれていた筈じゃな？」

訊かれる事を予想がついていたのか、風見が憮然となる。

「お前は是と答えた。じゃから、わしは安心して黄泉路へ旅立つ事ができた。それについては感謝してもしきれんと思っておるよ。
――――だが、あれは何じゃ」

転生して多少腕が鈍ったかもしれないが、名うての霊能力者であるミツに気配を気取らせず、簡単にアヤカシを屠ったあの力。
あの黒髪の青年と、姿は見る事ができなかったが、もう一人。

「今宵、アヤカシを退治たのは、あの鬼子たちじゃな？」

それは確認というよりも断定的な問いかけ。
既にミツは確信してしまっている。

出会った頃は、ミツの背丈ほどもない小さな子供たちだった。
それまでの苛酷な環境が充分な成長をもたらさず、果たして不自由なく育ってくれるものか、最初は気懸かりだったものだ。

それが今では身の丈は倍ほどはあろうかという立派な青年に成長していた。
わずかな邂逅であったが、目に留まった青年には当時の面影など見る影も無かった。
まるで別人のようだとも思ったが、懐かしい気配を思い返してみれば彼らは間違いなく、彼女の養い子たち以外の何者でもない。

「まったく妙な所で勘が鋭いんですから」

遠回しに肯定した風見もミツを誤魔化せるとは思っていなかったようだ。

「まさか、この都で会うとは思っていなかったんですよ。そうと知っていれば、すぐさま別の都に連れて行ったのに」
「風見、わしが養い子たちを気にかけておるのは知っておったじゃろう？　お前があの子たちと相性が悪いのはわしも知っておるが」
「そうです、私はあの身の程をわきまえぬ鬼子どもが嫌いです」

きっぱりと言われてしまい、ミツも二の句が告げなくなる。

「か、風見？」
「己がどれほどの幸運を手にしているかにも気づかず、ミツ様の厚意に甘えてしたい放題に！
…まぁ、他ならぬあなたの頼みですから、尻についた卵の殻が取れるまでは面倒をみてやりましたよ。仕方なくね」

ミツが去ってから一体、何があったのだろう。
これほどまでに冷ややかな敵意を剥き出しにするほど天狗と養い子たちとの関係が悪化していたとは。
この分では世話をしたというその内実もろくでもないものに違いない。

こんなりをしていても、アヤカシはアヤカシ。
人選を誤ったかとミツは少し後悔した。

「あちらの方からもう面倒はみなくて結構と言われたんです。ですから、…十年以上、もうあの鬼子たちとは顔を合わせていませんよ。
退治屋の真似事をしているとの噂は拾ってはいましたが、あの見た目ですからね」

鬼としての異質な外見の事を言っているのだろう。
鬼としての特徴を色濃く示す髪や瞳の色は早々、隠せるものではない。
風見の口ぶりから、十年以上経っても尚、鬼たちへの偏見と迫害は変わっていないようだ。

だとすれば、普通の職にはつけまい。
その、人よりも強靭な身体能力が活かせる退治屋は、うってつけとも言えるのかもしれない。

が、養い子たちには、自分のような死と隣り合わせの命のやり取りから遠ざけ、穏やかに次代を育むような暮らしを望んでいたミツとしては、複雑な思いが渦巻く。

多くの鬼たちはアヤカシと同じように、人の立ち入らぬ禁足地に隠れ里を構え、自給自足で生活を営んでいると聞く。

ある程度、養い子たちが回復し、首枷の問題を片付けたら、ミツはその隠れ里に彼らを連れて行くつもりでいた。
そこでなら、隠れ住むようにとはいえ、脅かされる事もなく、ごく普通の平らかな暮らしに戻れると思っていたから。

――――しかし、本当に彼らが戻れるかどうかは五十年生きた老婆にも見通せるものではなかった。

首枷の呪をかけた者に対する激しい憎悪。
特に、気性の激しいダイラなど、手に取るように復讐を望んでいる事がわかり、どうしたものかと頭を抱えたものだった。
他人が言ってわかるような話ではない。ただ、無残に幼い命を散らせる事だけは避けたかった。

そんなミツがどうしたかというと、単純明快に、わしの屍を越えて行け作戦だった。
わし一人斃せぬようでは復讐なぞ唱えても片腹痛いわ、と、痛烈に笑い飛ばし、稽古がてら術で容赦なく相手をしてやったのだ。
他の三人が比較的、手がかからなかったからよかったものの、なかなか刺激的な毎日であった。

「元気にしているのならそれでいいんじゃが…他の三人はともかく、ダイラとか、ダイラとか、ダイラとか…心配じゃ。
ヤシロも言葉を取り戻せたのか…トナミは思い詰めて無茶をしていないか、サラシナも阿呆な事をしでかしていないか…」

目覚めてから気にならなかったわけではない。
だが、何かあれば風見はきちんと言ってくるだろうと信じていた。
心にかかる養い子たちの事に、顎に小さな拳をあてて考え込んで

しまったミツを、風見は白い目で見やった。

「――――あなたという人は」

「っ、の！？」

急にぐいと引っ張られれば、また身体が傾ぐ。油断しすぎだろうか。

枯れ木のようだった老婆の時もそうだが、ミツのなりは平均よりも小さい。

並べられた寝具の上で胡坐をかく風見の膝上に、背を合わせるように強引に乗せられると、はめ込まれた組木細工のようにすっぽりと収まってしまう。

「風見！」

後ろから伸びた腕ががっちりと腹を拘束し、ミツの力ではいかんともしようがない。

どうやら今生では鍛えていないせいか、随分、身体の筋肉がやわに出来ているようだった。

「妬けます」

ぼそりと言われ、は！？と思い切り、ミツは目を見開く。

「あの鬼子たちが来てからあなたは来る日も来る日もそちらばかり気を取られて」

甘やかな囁き声に淫らな熱を秘めて語る唇が、止める暇も無く、こめかみに押し当てられる。

さらりとした、自分のものとは違う黒髪が首元をかすめ、ぎくり

とさせられる。

「このまま私のものにしてしまいましょうか。そうすれば、あなたは私の事だけ考えてくださいますか」

甘い甘い、恋仲の男女が交わすような、睦言めいたそれ。

人外特有の、滴るほどの色気に絡め取られて、並の女子なら正気を保てよう筈がない。

――この声には妖力が乗せられている。

悪巫山戯としては度が過ぎる。

「――放せ」

その熱の片鱗すら撥ね付ける、凍てついた少女の声が、一瞬にして熱を切り払った。

その含む本気を感じ取ったのか、首を竦めて風見は大人しく手を緩めようとして。

ミツの見えぬ背後でにやりと含み笑いをした。

「仰せのままに」

隙あればこそ、覆いかぶさるようにして、唇の端に触れるか触れないか、そこへ口づける。

何をされたかわかった少女、しかして実態である老婆は、いまだかつてされた事のない振る舞いに真っ白になる。

するりと逃げた天狗が不敵に笑っているのを目にし、羞恥に頬を染めるでもなく、ぶるぶると震えた。

「…っっっこの、たわけ者が――――！！！」

盛大な怒鳴り声を背に、しかし風見は、久しぶりですからちょっと花街にでも顔を出してきますよ、と、綽々とのたまって、ミツを一人残して夜へと消えた。

そして、翌朝、何事もなかったかのように、朝餉の時に姿を現したのだった。

09　選択

ミツの屋敷があった萩の都へは、黄京から牛車で二日、単騎で駆ければ半日の内に都に入る事が出来る。
そこから外海にも近い郊外に構えた屋敷へは、さらに馬で一日を要する場所にあった。
徒歩の旅ともなれば通常、馬の十分の一ほどの速度しか出ない人の足なので、五日は優に歩き詰める事になる。

馬を買う金子はない。ので、必然的に徒歩の旅となる。

いい加減、風見に頼るのも少々、後が恐くなってきた。
元々、人の手を借りるのは好きではない上に、借りる手は選ぶべきだと過去に学んでいる。

さて、どうやって金策にあたるか。
また、かつてのように貴族の荘園に恩を押売りに行くか。
風見の話だと、国から派遣される衛士の数が圧倒的に少ない地方の方が、打つ手も限られ、アヤカシの脅威に怯えているという。

荘園はその領主となる貴族次第によって庶民の生活も大きく変わる。
かつても荘園の貴族だけが保身の為に衛士を一人占めにしていたものだ。
が、アヤカシに通常の刀は効かず、結局、退治屋の出番となり、商売上手でもある天狗が搾れるだけ金を搾っていたのを思い出す。
退治た後、霊験新たかなアヤカシ避けの魔除け札でもしたためてやれば、一枚幾らにもなる筈だ。

自分の髪を売る事も考えたが、下手に自分の力を削ぐ事も躊躇われ、大した金にもならぬだろうと取り止めた。
贅沢を言えば、巫女装束を改め、もっと地味な服装に整えたいとも思っているが、借りた手拭で身体も清めたし、着たきり雀にそこまで抵抗があるわけでもない。

萩までは一本道、かつて通った道でもあり、地図が無くとも迷う事はないだろう。
若い頃から野宿には慣れている。水脈は豊かで、術を使えば狩をする事すら容易い。

季節はまた巡って、今は春の盛りを過ぎた頃だという。

うららかな陽気は絶好の旅日和だ。街道にもぽつりぽつりと同じ地を踏み固める同士が見える。
雨に降られても服が濡れるだけで風邪も引かないだろう。

「本当に萩に戻られるおつもりですか」
「…」

一定の間隔を空けて後をついてくる風見からの問いに、足を止めない事に替えて返事とする。

朝に顔を合わせて怒りがぶり返したが、そこまで真剣に怒っているわけではない。
あそこまで接近を許してしまった自分にも非はあると思っている。

はっきり言って、半分八つ当たりだ。

昨日から折に触れて気づいていた事ではあるが、身体の反応が鈍

いのだ。
肉体年齢的には若返ったのだから、もっと容易く動けるものだと思っていた。
だが、以前が特別だったのだろう。この十五年間、何をしてきたのかわからないが、足腰を鍛えるような事はしていなかったらしい。

思い通りにならない自分の身に内心焦っていた。
アヤカシは様々な種族に分かれるが、鼠のように隼のように恐ろしく素早い相手もいる。
これはアヤカシ退治をする人間にとっては、命を左右する問題だ。
この今生の自分が何処まで退治屋として通用するか、試される時がきっとやって来る。

――それにしても、風見は一体、何を考えておる？

一夜明けて、本当に今更ながら、ミツは風見がここにいる事の意味を考える。

山神に頼まれてミツを迎えに来るまではいい。
当然のように萩についてくるようだが、その後も共にいる必要はない筈だった。

それに、あまりにも過剰接触が多くは無いか？

昔からあのような振る舞いをしていたかと言えば、無論、否だ。
従者のように世話をしていただけで、まるで若い女子（おなご）にするようなあの態度は――。

…待て、若い女子？
――もしかしなくとも、今のわしか…！？

よく考えてみなくてもそうだ。

今朝も宿で借りた手鏡に映し出された見知らぬ少女に仰天したではないか。

風見はよくよく思い出さなくても、女子を好んでいた。

若い女子に限らず、気に入った相手なら誰でもという感じだったが。

———まさか、わしにまでなど。

思い切り血迷った事を考えた気がして、慌てて心頭滅却する。

出会った当初、ミツは十七か八、若い女の部類に入ったが風見は見向きもしていなかった筈だ。

自分を殺そうとした相手に懸想するほどあの天狗も物好きではないと信じたい。

それに自分は見た目はこれでも、中身はれっきとした老いた婆なのだ。普通は、生前のミツの皺くちゃな姿を思い出し、興醒めする事だろう。

「ミツ様、何の為に萩に戻られるのか、お聞きしても？」

次の問いに、ミツはふんと鼻を鳴らす。

「白々しい、勘付いておるくせに。無論、常磐の山神にお会いしに行くのじゃ」

養い子たちの動向も気になるが、何処で何をしているのか、調べようもない。

そこでミツは今後を見据えて、まず手元に神具を取り戻す事にした。
常盤山の山神に一度は返した神剣を再び借り受けようと、萩に戻る事にしたのだ。

今後、アヤカシが再び世を跋扈するというのなら、また退治屋の出番も増える事だろう。
その際、手ぶらではいささか心許ない。
術を主力とする事も可能だが、下準備を十全にしておかなければ負担が大きい他、発動までに時間もかかる。
咄嗟の時を考えても武器を手元に置く事は悪い考えではない。

「やはり、あなたは戦いに戻られてしまうのですね」

そのしみじみとした声に含まれる悲しみに似た色に、足が思わず止まる。

後ろを付いてきていた風見は少し離れた道の先に、相変わらず微笑みを浮かべて立っている。
その目に、人知の及ばぬ深みを知る色をたたえていた。

「ミツ様は本当は戦いをお望みなのでしょうか。その手でアヤカシの首を落とす事が何よりもお好みとか？」

皮肉気に言われるならば、憤然として下らぬと切り捨てる事も出来た。

だが、天狗はとても静かに問い掛ける。

「転生されてもあなたは退治屋を選ぶ事に何の迷いもない。一人の

ただの娘として手を汚さず生きる事もできるのに。
あなたはまるでアヤカシに魅入られているかのようですね」
それは考えてもみなかった事だった。
言われて、そうかと手を見下ろす。
肌に張りのあるこの白い手は、まだ何の色にも染まっていないのだ、と。
それなのに心は自身も知らずにまた選び取っている。アヤカシと戦い続ける血濡れの道を。
「…そうじゃな、わしは魅入られているのかもしれん」
前世の記憶がなければ、ただの娘として生きただろう。
村で世話になったヨネのように、夫と添い遂げ、子を授かり、土にまみれながらも、穏やかさに満ちた人生を。
それは夢のひとひらよりも儚い未来。
記憶を引き継ぐというのは代償の一つなのだろうと風見は言ったが、まさしくそうだ。
前世の業と共にここにあるミツが他に選ぶ道はない。
「わしは他に生きる術を知らんからなぁ」
しんみりしてしまったのを誤魔化すように、眉を下げて苦く笑った。
自分に何か出来る事があるというのは救いだと思う。それが、たまたま人の命を拾う事に繋がるなら上等ではないか。
昔はそのように思えなかったが、人は変わる。

いかに自分の手が血にまみれようとも、その身を化け物と謗られようとも望むところだと今は思っている。

過去のあれこれを思い出していたミツがふと我に返ると、さっきまでアヤカシらしい不透明な問答を投げかけてきた風見が沈黙している事に気づいた。

――――しかも、どうしてか、ものすごく不機嫌になっている。

つかつかとこちらに近寄ってくると、ぺしりと頭をはたかれた。

「なっ…？？？」

痛くはないが、ミツに手を上げた事の無い風見の振る舞いに驚いて、ぎょっとしてしまう。

「…頭にきます」

ぼそりと言う声が、地を這うほどに低い。

「全てを決め付けてしまっているあなたもそうですが、そんな風に思わせた人間たちが」

私の前に現れたら縊(くび)り殺してやりますのに、と、次に笑顔になる。

――――背筋を氷の手で撫でられればこのような悪寒を感じるのかもしれない。

「か、風見？」

「あなたがお望みなら仕方ありませんが、何時でも他の道は開かれているのだという事をちゃんと覚えておいてくださいね。

まぁ、別にこの国のアヤカシを殺し尽くすくらい大した事じゃあ

りませんし。全然問題ありませんとも」

あまりにも不穏すぎる内容に突っ込みたかったが、今の笑顔の風見には何を言っても無駄な気がした。

１０　天子（前書き）

場面が変わり、少し暗い話が続きます。

10　天子

――――ここに一人の語り部を招こう。

何から始めまするか。

語り部は問う。

そして、まずこの地におはす神々について語りますれば、と言った。

――――神は人の目にははきと見えぬものであれど、その存在を感じ得るものでありまする。

まずこの器たる世をお創りになられたのが、あらゆる神々の祖となる三貴神であられまする。

一に、昼を与う日之神。

二に、夜を捧ぐ月之神。

三に、大地を愛でし地之神。

いずれもこの世の根幹に関わる偉大な神々であられまする。

神々と一口に申しましても様々でございまする。

山の麓に住まう民はまず、恵みを授く山に宿る山神を信じますれば。

浜の傍に住まう民は、海神の怒りに触れまいと心得る事にございましょう。

あまねく人の手が届かぬ事象は、神の領域だと言われておりますね。

遙か高みにおはす高貴なる方々の裁定を、わたくしたち只人は甘

んじて受けなければならないのでございます。

こう表しますと、神が自在に事象に手を加えるような誤解を生じまするか。

只一言、申し上げるのならば、そこに在り続けるだけで神は神なのでございます。

神は人を試すもの。ゆえに、時に非情とみえる裁定が下される事がございます。

神はそして、この地に息づくアヤカシをも見守っておられまする。

人とアヤカシ、それは等しくに。

――アヤカシについては、また別の機会に語りますれば。

話を人の手に戻しましょうぞ。

――世に光を与う主神、日之神。

その神の祝福を受け、東の国を統べる選ばれし民が、天子なのでございます。

と、語り部は結んだ。

――天子は神より授けられた国の至宝でございまする。

主都である黄京(ききょう)から四都に繋がる筋はそれぞれ色の名前がついている。
南方の萩なら朱(あか)の大路。
西方の安和(あわ)なら白の大路。
北方の葛名(くずな)は黒の大路、最後に東方の撫子(なでしこ)が青の大路という風に。

国を挙げての慶弔行事にあたる特別な日には、象徴する色が塗られた飾り提灯を軒下に吊るすのが慣例であった。

いつも各地毎にてんでばらつく時の鐘が計ったかのようにほぼ狂いなく打ち鳴らされ、鈍くこもる残響が消えぬ内にと、大路沿いの家々は手早く提灯に火を入れる。

もし黄京を見下ろす事が出来たのなら、しずしずと宵闇が迫る薄暮の空の下、都を十字に割くように浮かび上がる、赤、青、白、黒色の鮮やかな筋を拝めるだろう。
天におはす神々に照覧あれと知らせるための標(しるべ)だ。

常と異なる彩りの軒下に立つ民草の視線は、知らず知らず、京の西方、白の大路の方角に吸い寄せられる。

その大路の一辺に何があるか、黄京に住まう民に知らぬ者はいない。
――――東国の中枢、天子のおはす御所。
それが今宵始まる、神々をも観客に迎えた、数十年の時を越えて繰り返される舞台の名となる。

夕刻を迎える以前から御所内は赤々とかがり火が焚かれ、準備に追われる侍従や侍女たちが随所で慌しく立ち働く姿が目立っていた。

式典が執り行われる地は、一同を受け入れられる広間と高座を持つ、二之御殿。

定刻に合わせて次々と門をくぐった参内者たちは、階級毎に定まった色目豊かな衣ではなく、一様に式典用の暗色の直衣に改めている。

途中に設けられた渡殿や控の間に集まる彼らの姿が、華やかな御殿に落とされた墨滴のようにみえるのは、彼の思い過ごしか。

むしろ、今から行われる一幕はこの国の暁闇を払うための寿ぎである筈だ、と、自らに言い聞かせるように呟く。

――先んじて噂はあったが、よもや今日の日であるとは。

――確かに主上(おかみ)の御気色は優れないと聞いていたが…。

――まさか、先日、アヤカシが現れた事と何か関わりが。

――恐ろしい…五十年前の変事がまた繰り返さねばよいが。

目新しくもない御所にまるで初めて足を踏み入れるかのような戸惑いを誰もが滲ませ、囁き交わされる会話はどれも仄暗い影をまざまざと見せ付ける。

それをはっきりと不快に思いながら、黒の直衣をまとった少年は、奥殿の一つ、四之御殿へと足を速めた。

四之御殿は次代天子の母となった后に与えられる場所であるが、現在、その主は不在となっていた。
ちなみに一之御殿は神を祀る聖なる御座、二之御殿は執政のために用意された最大の御殿、三之御殿は次代天子を授かる後宮として后の住まい所となっている。
三と四の御殿はその性質上、天子の居住区となる奥殿に含まれ、奥まで入り込める者も限られる。

はっきり言って、至高の血族でもない限り、彼の年で奥殿への参内が許されるのは異例だ。
藤永（とうえい）は立派な体格を備えた凛とした男子で、冠も直衣姿もきりりと様になっていたが、年は十五に達して間もない。
年若い部類に入るが、すれ違う朋輩たちにこやかな顔つきのままそつなく挨拶を述べつつ、真逆の事に頭を働かせる程度の腹芸は既に心得ていた。

笑顔で腹にじわりとわだかまる苛立ちを押し殺したまま、人気の無い四之御殿に移動し、目当ての室へと辿り着いた瞬間に、仮面を脱ぎ捨てた。
「貴斗（たかと）、いるか！」

生気に満ちた、朗々とした声が静けさを打ち破る。
ぐるりと廻らした視界に人がいない事を確認し、藤永は遠慮なく、次の引き戸へと手をかける。
「貴斗！」

「――――そのように大声で呼ばずとも聞こえているよ」

声の主は内庭に面したささやかな縁側の端に見つかった。

暗色の直衣とは対照的に、白一色の袍をまとった青年が板敷きの縁側に行儀悪く片膝を立てて座っていた。

たった一つ、茂みに抱かれるようにして立つ石灯篭が淡く光を広げている。

この四之御殿に移り住んで一年、毎日、飽きるほど目にしているだろう庭を。

貴斗と呼ばれた青年は藤永より年嵩で、今年、二十歳になろうとしているが、背丈は既に藤永に負けている。

自分の隣に並び立った藤永にちらりと目を上げ、貴斗は線の細い面の印象そのままに少し笑う。

病弱な生まれではないが身も顔も繊細な造作で、肌は装束を引き立てるほど白い。

短くは無い付き合いながらも、藤永は大口を開けて笑う彼の姿をいまだ見た事はなかった。

「…何を笑っている」

「ん、まぁ、想像通りだと思ってね」

貴斗は草を食む牛のようにのんびりと応え、藤永はますます愛想笑いとは程遠い仏頂面となる。

あまりにも常と変わらない義兄の様に、少年は理不尽な怒りを覚える。

――――数奇な出生を持つ貴斗は、生まれてすぐ藤永の生家である

葦原家に引き取られ、実の兄弟のように育った。
細腕にも関わらず、貴斗は幼子だった藤永をよく抱き上げ、庭の草木の名前や自国の古史に至るまで教えてくれる、良き教師でもあった。
つい最近まで二人は同じ屋根の下、上も下も無く、気安く暮らしていたのだ。

葦原家の屋敷の中では衣装をくずし、よく身の回りの世話をする侍従を嘆かせていた貴斗。
こうして装束を一部の隙も無く調えると、まるで別人にみえる。

———それは言葉のあやではなく、本当に彼は『別人』を演じるのだろう。

愚問だと知っていつつも、藤永は問わずにいられなかった。

「本当に———これで良いのか、貴斗」

これで良い筈がない。
この選択が彼の平らかな望みとは対極にある事を知っている。

それでも藤永がこの瞬間に彼の返す応えを待ったのは、今なら覆せるのではないかと願ったからだ。
事態が土砂のように戻り難く押し流されていく今、どんなに無謀で浅はかな願いであるのかは重々、承知ではあったが、己だけは彼の望みに添うてやりたい、と。

息をひそめて控える弟へ。
下ろされた瞼が開くまでに一呼吸あった。

「――あぁ、選んだからね、私は」

四季折々の草花で区切られた小さな庭は、彼自身の手で土を掻き、整えられたものだ。

それを隅々まで目に焼き付けるように義兄は視線を動かさない。

ただ、口許は微かに緩められていた。

それを見て、藤永は黙って肩を落とした。

その夜、月之神が青白き身を夜に捧げて見守る中、粛々と式は行われた。

――次代への、天子の譲位。

前天子は名を改め、新しくその座に据えられた天子は人としての名を喪う。

年若き天子の後見は左大臣職を拝する葦原家が引き続き務める事を周知した後、あっさりと場は解かれた。

――貴族一同を前に執り行った式は顔見せ以上の意味を持たな

い仮初めのものだと、彼は言った。

11　継承（前書き）

前話と続いています。

11　継承

所は変わり、一之御殿に移る。
三貴神を祀る御所の中でも最古の建物であった。
さすが、よく手入れはされているものの、足を踏み入れると空気の色が変わって感じられる。

長く至高の位にあった男の背を黙って追いながら、貴斗は終始案じていた弟の顔を思い出していた。
処世に長けた葦原家の血を引くだけあり、何事も如才なく立ち回ってみせる彼が示した、朴訥と言ってよいほどの気遣いは、この寒々とした御殿でどれ程温かいか。
天子の座に着き、目の前の男を正式に父と呼べるのだとしても、微塵もそうする気は起こらなかった。

この御所に身を移しておよそ一年。
考えるだけ考え、仕方なくでもなく、この道を選ぶ事にした。

好ましいとは言えないが、藤永がみせる懸念とは裏腹、彼自身は実はそこまで悲観もしていない。
藤永の父である実直な左大臣も協力を申し出てくれているし、さらに摂政を務めた辣腕の時峰（ときみね）公も相談役として存命していらっしゃる。

誰かが負わねばならない役目だった。それがたまたま自分だっただけだ。

自分の望み通りの暮らしを送るには、あまりに厄介な血を継いでいたのだから、どうしようもない。

この国を統べる資格のある、正統な天子の血を。

――――だが、一之御殿の奥深くへ進んだ先に待っていたものは、数百年に及ぶこの国の恐るべき暗部だった。

何もない、室だった。

畳の一枚もない。四方を目にした事のない紋が刻まれた壁が囲っている。

ただの板敷きの床に素足をつければ青白き夜が染み入るように冷える。

四隅に置かれた紙灯篭の光さえ何処か暗く思えるのは重苦しく感じる心情のせいか。

――――予感がぞくりと背を這い上がる。

部屋の中には既に先客がいた。

二人の姿を認めると、静かに腰を折って立礼を取った人物は、現左大臣ではない、藤永の祖父にあたる人物、葦原の時峰であった。

皺深き顔を見ずとも相当な高齢である筈だが、年と共に骨ばって身は細ろうとも、重厚な衣で仕立てられた直衣に冠で白髪頭を整えた姿は背も曲がっておらず、たわみのない威厳を感じさせる。

――――何故、ここに時峰殿が…？

今宵、天子の位を譲った男、定康（さだやす）と名乗る事になった前天子は、時峰を前に目を細める。

無言のまま向かい合った二人の間に通い合う縁（えにし）は単純なものではないだろう。

今年、六十を迎える定康が天子位を授かったのは齢十一と聞く。
その治世は波乱に満ちていた。在位直後に魔の変革が起こり、長くこの地を慄かせる災禍と渡り合わねばならなかった。
身体も丈夫とは言えず、床に伏せりがちな天子を公私に渡って支え、時に摂政の任も務めたのが、この時峰という老人だ。

———一年前に突如として宮廷を騒がせた自分という存在を、貴族たちに否が応に受け入れさせ、他の血族を差し置いて、この天子の位に彼を据えたのも。

「これより使役鬼の継承を行う」

淡々と告げられた声に、はっと顔を上げれば、年を経た自分に似ていなくもない容貌の定康が己を見つめていた。

「シエキキ…？」

呑み込めずに戸惑う貴斗を無視して、定康はついと視線を滑らせる。
同じようにその先を向けば、今まで誰もいなかった筈の壁際に黒くわだかまる影が増えていた。

闇色の装束をまといし男の風貌に喉から細く息が洩れる。
その髪の色は仄かな灯りでもはきとわかる見事な銀で、人の持つ色彩ではなかった。

———鬼の一族。

名だけは知っていたが、まみえるのは此度が初めてだ。

喉元までを覆う肌に張り付くような忍装束は、強靭な肉体を浮き彫りにしている。
頭を下げて跪く男の顔はまだ見えない。
「我は天子として命ずる。今日この時より、お前はこの相手を主として従うのだ。天子はこの者に譲る」
この鬼を視界に入れるのは一時も許せぬと言わんばかりに、感情の削ぎ落とされた顔は背けられている。
「――主上」
一瞬、誰の事かと訝るも、時峰の視線は貴斗を示していた。
「この鬼に名をお与えください。それで、この鬼はあなたのものとなりましょう」
貴斗の細い眉が怪訝にひそめられる。
だが、通う圧力が質問も反論も許さない事を悟ると、一つ息を吐いて従った。
「…わかりました。ならば――ナガレ、と」
その髪色が川の水面に遊ぶ銀の光に似ている――と、深く考えずに口にした。
その瞬間、全身を貫いた衝撃は只事ではない。
身の内から造り変えられるような異様な不快感が込み上げ、歯の奥を噛み締めて耐える。
左手首が熱い。

場を見渡しても何も変わった様子はみられないのに、一人だけ別の世界に遠のいたかのように視界が揺らめいた。

長いような短いような不確かな時間が過ぎ、ようやく我に返れば、何気なく見下ろした左の手首の裏に「縛」と読める崩された字が刻まれていた。

「――――これは」

「印でございます」

答えたのは時峰だった。

「その鬼を縛した印。これからその鬼は主上の意のままに従いましょうぞ」

「…」

「天子たる貴き御身でありますれば、かの鬼は命を賭してあなたを守りましょう。――――ナガレ、ご挨拶せよ」

命じる事に慣れた声に応え、鬼は面を上げる。

――――その顔は。

美しいとも評される造作だったろう。頬の肉が削げ、その二つの眼が虚ろな洞穴の如しでなければ。

恐らくは黒ではない、瑠璃色の瞳は曇った硝子ほどの輝きも無い。年齢も若いのか老いているのか。鬼の寿命は人とは異なるとも聞く。計り知れぬ時を生きているのやも知れぬ。

「謹んで、お仕え奉ります」

背筋をそそけ立たせる寒気に、貴斗の顔が歪んだ。
定康が目を背けるのもわかる。気持ちが悪い。その一言に尽きた。
名を呼ぶ事がこんな事態を招く事を知っていれば、けして呼ばなかっただろう。

「主上にその証をお見せするのだ」

動じる気配も無く、時峰はすべき事として命じる。

鬼は黙って喉を覆う布を引きずり下ろした。

先ほどより、その首元に赤黒い光がまとわりついているのに気がつかないではなかった。
だが、装束に隠されていたものは予想以上に醜悪と言えた。

男の喉を締め上げる細い鎖が二つ。
赤黒い、それは古びた血の色にもみえる。
凄まじいのは、その鎖が男の喉の肉を抉っているのがはっきりと目視できる事だ。

――――それが首枷と呼ばれる呪法である事を、まだ若き天子は知らない。

定康と時峰が揃って深く頭を下げる。
だが、それは浮かぶ嘲弄を隠すためでないと誰が言えるのだろう。

――――自分は一体、何を継いだのか。

茫然自失したまま、天子はこの屋敷に立ち込めるそれを、血の臭

いだと思った。

12　波紋

――――何故だ…！

なにゆえあの小僧が天子でなければならない。
我が姫の子ではなく、不慮に彷徨い出た亡霊の如し輩に何故奪われねばならぬ！

正統な天子の血筋を継ぐ者だと？　既にここにいるではないか。
まったき男児が、天子に相応しい血族が。
真偽も知れぬ面妖な出自の輩を選ばずとも、ここに！

主上は一体、どうしてしまったのだ。
時峰公は何故、このような暴挙を許す！？
田舎領主どもは何故、黙っているのだ！？

…認めるものか。
あの男が至高の天子であるなど。

認めるものか。認めるものか。認めるものか。認めるものか。認めるものか。

萩までの道のりは運が良かったのか、何事もなく終わった。
動乱期と比べれば格段に柔らかな空気が流れているのを肌で感じる。
当時はどの場所にいても空気のどこかしらに鼻につく金臭さが含まれていたものだった。
着実に時は流れておるのだなと感慨を覚えつつも、同時にいまだ濃く残る惨禍の爪痕も目についた。
黄京の中心街は確かに目覚ましい復興を遂げていたが、平屋もまばらな郊外へ景色が変わるにつれ、癒しきれぬ傷が目立つ。
アヤカシの襲撃を受けて絶えたのだろう集落の跡地では、腐った柱が片付けられる様子もなく、今の時期には青々と芽吹く筈の田畑も白く干からびて無残な有様をみせていた。
――――それもやがて一度土に還り、またその地を踏み固めて人は歩む。
退治屋もその内、無用となるだろう。
きっと遠くは無い未来に。
だが、それは今ではない。
生き延びた人々が苦吟を耐え忍び、ようやく怯える事無く眠れるようになったと思った、その矢先。

ぽつり、ぽつりと。
巨人の手で頭部を引き千切られたような死体や、獣に食い荒らされたとしか思えぬ家畜の死骸が発見されるようになった。
多くは無いが、人々にかつての悪夢を思い知らせるような、派手な惨状の屍が。

黄京に戻るのだという荷馬車を引き連れた商人によれば、アヤカシだけではない、この頃、旅人や村々を襲う野盗が顕著に増えているのだともいう。
巣食う不安や絶望に人心は乱れたまま。ろくに取り締まる衛士もいない現状ではどうしても不逞の輩が増えていく。

———黄京で目にした華やかさは見せかけだけのものだったか。

黄京の都で目撃した獣、それは間違いなくアヤカシだった。

風見の言葉を信じるならば、ミツの知らないおよそ十年以上の空白において、アヤカシはほとんど人を襲わなかったのだという。
それだけの時を経て今また再びアヤカシが動き出す、その理由は。
この符号は一体、何を意味するのか。

さて、不思議のアヤカシには通常の刀やいかなる武器も効かぬ。
砥がれた刀も頑丈な鍬(くわ)も、アヤカシに触れればたちどころにそのかたちは歪み、霞んで突き抜ける事はよく知られる所だ。
人の身に宿る霊力を込めた得物ならば話は別だが、そのような武具は既に伝説の域と化している。

アヤカシを打ち倒すには呪（しゅ）――それも神の威を勧請する神呪が要る。

呪の源となるのは霊力。

退魔師、退治屋、アヤカシ喰らい、火刀、呼び名は色々あれど、それぞれ霊力を駆使する技に秀でた者である事は間違いない。

霊力は人の身を生かすのに必要不可欠なものだ。人の魂魄に宿る力と言い換えてもよい。下手に扱いを違えて損ねれば、反動で心の臓を止める危険すらある。

こうした稼業に身を置く人間にまず若者は少ない。

たとえ才があっても通用するまでには最低年単位の修練を要する上、やはり経験が物を言う世界だ。

そして、強大な力は時に人の心を蝕む毒と成り得るがゆえに、神呪は厳選された次代にのみ受け継がれた。

つまり――多くの民はアヤカシから身を護る手段を持たないに等しかった。

襲撃を受ければひとたまりもない。息を潜めて隠れるか、逃げ惑う事しか出来ぬ。

アヤカシも無欠の存在ではなく、鼻が利かないもの、目がよく見えぬもの、動きがのろいものもいる。

人は知恵を振り絞り、かろうじてアヤカシを退けてきたが、それも多くの犠牲を孕んでの事は言うに及ばず。

次から次へと現れるアヤカシとの戦いは無限に終わらないようだった。

術で退治ても退治ても、数日と経たぬ内にまた別のアヤカシがふ

らりと現れて襲う。
魔除けの札を幾ら書いても、墨が乾かぬ内からその日の戦いが始まる。
そんな息つく暇も無い日々が続いたある日、木陰で次の戦いに備えて道具の手入れをしていた退治屋に、木の精霊（しょうりょう）が転機をもたらした。
――――山神の存在を、その時、初めて知る事となる。

萩の一角に泰然と座する常磐山。その地は、身を洗われるような清冽な気に満ち、神の威光にいささかの曇りもない。
春を迎えて岩地を這い登る緑が匂い立ち、途中でくねっていた木々も生い茂って、すっかり模様替えが終わっていた。
――――生きて再びこの地を踏む事はあるまいと思っていたのに。
なんだかなぁ、という気分ではあるが、苦笑で済ませてしまうのは我ながら図太いだろうか。
ミツの背で、紐で一つに絞られた黒髪の束はまだ乾ききらず、艶やかに光を弾き返している。

神域に入るのに旅の埃まで連れて行くわけにはいくまいと清水で禊を行ったのだ。ついで着物も藍染の袴に変え、ようやく緋色から解放された。

ちなみにそれは風見の懐から賄われたが、ミツ様に着物を贈るなんて初めてで嬉しいです、と、やけに喜ぶ天狗に疲れを覚え、いっそ開き直る事にした次第である。

「――――常磐の山神よ」

また再び、覆い被さるように葉を広げる大樹の根元に、頭を垂れてうやうやしく跪く。

枯れた老婆の声であろうと、瑞々しい少女の声であろうと、変わらぬ凛とした響きが静寂を打つ。

――――まずは何より感謝を。

本来、神はそう易々と動く存在ではない。

またそうあってもらっては困る。それほどに世を揺るがす影響は計り知れず、神が持つ面は優しい顔だけではない。

正直、長く懇意にしているとはいえ、常磐の山神が上位の神々にわざわざ伺いを立て、働きかけてくれるとは思ってもみない事だった。

――――あの忌まわしき首枷の呪は魂魄にまで深く根を張る、最古の呪の一つ。

解呪はすなわち幼き命との等価そのもの。

幸運だったのは、かけられていた呪は完成されておらず、まだ付

け入る隙があった事か。

神の意が奈辺にあるのか、人の身にはかる事はできぬが、それが気紛れであれ、憐憫の慈悲であれ、理由は何であろうと構わない。

結果として、子供たちは生き延びた。感謝してもしきれるものではない。

「今一度心からの感謝を…それに、末期の際にはご迷惑をおかけしました事、お詫び申し上げまする」

程なくして、艶めいた妙齢の女の声が応えた。

———顔を上げよ。

わずか苦笑の気配を帯びるそれは、人の顔があれば、子を遠くから見守る母のそれであったろう。

———礼を言う必要はない。これは一方的な取引ではないゆえに。

…お前の今生はいささか毛色の違ったものとなろうな。

付け加えられた一言に、ミツは少し首を傾げる。

短い言葉の中にも、やけに深刻な響きを感じ取ったからだ。

———お前がここへ来た訳も承知。剣(つるぎ)の事であろう。

さすが山神、麓の精霊たちから伝わってでもいたのか、お見通しのようだ。

が、返ってきた返事は予想の斜め上に外れていた。

「――神剣がない？」

この山神の手元に現在、神剣はないのだという。
それではどちらにと尋ねれば、助力を恃んだ相手に授けたのだと山神は説明した。

予想外の事態に、ミツは考え込む事になった。

無いものは仕方が無い。神剣に代わる武器を探すしかないだろう。
山神が貸し与えたのなら、その相手から神剣を取り上げるわけにもいかない。

――代わりと言うては何だが。

「っ！？」

大樹の陰から、わさわさと葉を蓑のように繁らせた小さな丸いものがころころと転がってき、目を丸くするミツの膝先で、ぽかりと口らしき空洞を開けた。
その中に、きらりと光る何かが入っている。

――これは取れという…ことか。

何という斬新な、と多少理解不能に陥りつつも、指先を突っ込んでそれをつまんだ。

大きいとは言えぬミツの手のひらの上に収まるそれは、細枝に巻きつけられた一巻きの糸だった。
見事な飴色をした丈夫そうな糸が何重にも巻き付けられている。

――何故に、糸…？

正直に言えば、短剣でもいい、手に馴染む刃物がほしかった。
だが、神から下賜された品に文句をつけるほどミツも命知らずではない。礼を述べて、ありがたく頂いた。

――風見。

この場にも無論ついてきていた天狗だったが、口も挟まず沈黙していたため、山神に呼ばれるまで半ばその存在を忘れていた。

――変わらず勤めよ。

「承知」

優雅に一礼を返した風見の顔が一瞬張り詰めたようにもみえたが、何だと思う間もなく、山神の気配が遠ざかっていくのに再び姿勢を改め、ミツは一つ息を吐いて立ち上がる。

手の中の糸巻きを見つめて、もう一度頭を下げると、その場をあとにした。

13　異変

萩の都は他の都に比べて広大で、大半が農地で占められた緑豊かな地だ。
作物を栽培するには体力は元より辛抱強さも必要となるせいか、男も女も体格が良く、少々の事では動じないおおらかな気質で知られている。
その一方で、信心深い一面を併せ持っており、驚くような風習が横行する土地柄でもある。

ひとまず常磐山を降りて、萩で最も規模の大きい集落にまで戻ったミツは退治屋稼業を再開するために、知り人と会おうという考えがあった。

――――その先で、まさかの再会を果たすとは露知らず。

じぐざぐと平屋が密集する町は土臭く、乾いた干草の匂いがする。
黄京の何処か気取ったような、整形された雰囲気より余程肌に合う。
が、すぐに異変に気づく。首を傾げてしまうほど町が大人しいのだ。

元々、春は植付けで忙しくなる季節だが、まだ少し早い今時分であれば急ぎの農具の買い付けや職探しの男ども、逆に人足を募る荘園の家人が慌てて触れを出しに来るなど、例年もっと賑わっていた筈だった。
今日は人通りがまばらで、土の地肌が殊更広くみえる。

「ミツ様、これからどうなさいます？」

風見は相変わらずミツの隣から動かず、にこにこと妙に機嫌が良い様にみえる。
まるでこの展開を――――神剣が手に入らなかった事を喜んでいるかのようだと思ってしまうのは、狭量な邪推だろうか。

「私に一つ提案があるのですが、聞いてくださいますか」
「…何じゃ」

嫌な予感もしたが、ミツは律儀に一応、問い返す。

「せっかく生まれ変わった事ですし、いっそ夫君を探してはいかがでしょうか」
「は！？」

朗らかに言われた内容が理解できない。

――――こやつの頭の中身はどうなっておる。

「…聞き間違いじゃと思うが、いま夫君、とか言ったか…？」
「えぇ、良い考えでしょう？」

何が？

白い目を通り越して呆れた。
世話焼きな奴だとは思っていたが、まさか、自分の夫の世話までしようと考えているとは恐れ入った。

「一体、何がどうなってそんな事を思いつく？　わしに夫がいようといまいと関係なかろう」

前世ではミツは生涯独身であった。
娘らしく惚れた晴れたの恋だの連れ合いだの、正直、考えた事すらない。そんな暇があれば剣を握ってアヤカシを追っていた。

――――いや、一度だけ、それらしき複雑で疼痛に近い感情を持った時もあった。
だが、それも遙か昔の事だ。思い出そうとしてもすぐに思い出せないほどの、遠い記憶にすぎない。

「ミツ様のお子が見たいのですよ。どれほど可愛らしかろうと思いまして」

これ以上ない笑顔でまたも衝撃の発言を続けられ、今度こそ往来の真ん中でミツの歩みが止まった。

――――熱でもあるのか！？

いや、天狗が風邪を引き込むなど聞いた事もない。
それでは一体、何が作用してこのような突飛な妄言に至ったのか。

「…」
「ミツ様？　どうかされましたか？」

どうかしているのはお前だと言いたい。

「そういう話は、もっとまともな女子に言うておけ。年相応のな」

見た目は少女でも、内実は天と地ほどに違うと自覚しているミツとしては、世迷言にしか聞こえない。

それに、と、頭の端でちらりと思う。
常世から舞い戻ってきた自分は果たして子など望める身であろうか、はなはだ疑問だった。

「正直まだ実感はないが、今のわしは神の御許にお仕えする身。夫など持てる立場でもなかろうて。
子が欲しいなら風見、お前が嫁をもらえばよい」
「私の話はいいんです。私が見たいのはミツ様のお子だけですから。どうせなら一人と言わず、二人、三人と産んでいただければ言う事は無いのですが」
「あのなぁ…そんな事を真顔で言うでない！　子などそう簡単に出来るものではなかろう！」
「ふふ、私が人の身であるなら押し倒してでも協力致しますのに」

いつの間にやら、色めくより先に不穏な台詞を吐く風見。

…再会を果たしてより、この天狗が以前と異なる距離で自分に接しているように思えてならないのは気のせいか、そうでないのか。

風見は腕組みをして思案げに顎を撫でた。

「…？」

不意に彼の目がミツを通り越して、笑みを消したのに気づいた。

凝視する視線の先を追えば、木綿の胴着に身を包んだ目立つ特徴もない若者が、向かいの平屋の軒下に立っている。
こちらが気づいたのがわかると近付く素振りをみせたが、それを天狗は許さなかった。

鋭く目線だけで制すと、嫌そうに溜息をつく。

「…すみません。ちょっと野暮用が呼びに来たようです」

「知り合いか？」

風見は苦笑して頷いた。

「あの店先で待っていてくださいませんか？　すぐに済ませますので。

あまり、あなたをお一人にはしたくないのですが」

「構わん。わしも子供ではないんじゃ、黙っていなくなるような事はせんよ」

おそらく彼の同胞だろう、相手が去り際、自分に寄越した険しい一瞥が気になるといえば気になったが、相棒に任せておく事にした。

後を追った風見のすらりとした後姿が平屋の影に沈む裏路地に消えるのを見送り、ミツは言われた通りに足を向けた。

湿気た板塀の腐った臭いとぬかるんだ泥が出迎える裏路地には濃い影だまりが落ちていた。

「何の用です」

日の中より陰影の中にあってこそ引き立つ美貌の主は、ミツに相対していた時とはまるで別人の冷めた気だるい顔で、待っていた同族の男を見やる。

「か、風見様…」

年若い天狗が身をやつした無骨な若い男は居心地悪げにたじろいだ。

そのまま去ればいいものを、と忌々しく思う。

わざわざ遠方はるばるここまで出向いてきた、その一点をとっても厄介事の匂いが嗅ぎ分けられようものだ。

通常ならば一顧だにしないのだが、今はあいにくと彼女の存在がある。下手に余計な首を突っ込ませないために、風見は今ここにいるようなものだ。

時々、自分の一人歩きする風評でも聞きつけて、こうして見当違いの期待をかけられる。

恐々と柳瀬（やなせ）と名乗った相手は、ある意味、予想通りの用件を切り出した。

一族の里である山に帰ってきてほしいのだ、と。

「また姿を消した奴がいて、前に出てったきりの奴だって山に帰ってきやしない。しかもつがいものの片割れなんですよ！？

こんな事は異常だってみんな言ってます。心当たりの場所は総出で探しましたが、見つからないんです。…見当もつかなくて。

まだまだこんな事が続くんじゃないかってみんな不安がってるんです。
お願いします！　風見様、山に戻って俺たちを助けてください！」
募る焦燥そのままに早口で言い立てた柳瀬は、項垂れた頭をそのまま深く下げる。
その懸命な様子に心動かされる様子もなく、風見は片眉を撥ね上げた。
「わざわざこんな所にまで来て、他力本願ですか」
皮肉気な声は乾いて冷たい。
「そ、その、半分石化した長老どもは役に立たないし、他の上の連中も静観を決め込んでいて…俺たちみたいな若い奴らじゃ何とも、ならなくて」
恥ずかしげに柳瀬は肩を落として縮こまる。
さて何時だったか、彼が口にした事件を耳にした覚えはある。
おそらく数カ月前になるだろう。同胞が行方知れずになったと騒ぐ天狗がいるとの噂を聞いた。
天狗という種に限らないが、アヤカシは本来群れる事なく、個々で完結する在り方をするものだ。
長老と呼ばれる数百年以上生きた天狗や、ある程度長く生きた個体は、特に淡白で、樹木と同様に流れに逆らわず傍観する事を良しとする。
つがいという概念はあるが、幼少期の存在しない成体で生まれる彼らは他者から庇護される必要も無く、ほとんど横の繋がりを持た

ない事が普通だ。

風見自身、面白半分に徒党を組む事はあっても、人のようには同族を仲間として考えた事は無い。

悔しげに自らの無力を嘆くこの天狗はその点で物珍しく、奇妙だった。

ただ、次世代を残すために寄り添うつがいものでもこうはいかない。

まさか、他者を気に掛けるような感傷的な個体が存在していようとは。

天狗は自らの羽根で飛翔できる種族だけはあり、突然、生まれついた山からふらりと姿を消す事なぞざらだ。

さらに、魔の変革を経てからはどんな変貌があろうとおかしくもない。その度に行方知れずと騒いでいたらきりが無いだろう。

興味を覚えてその部分を聞けば、双子で生まれたんです俺たち、と柳瀬は言った。

「俺と綾瀬(あやせ)は生まれた時からずっと一緒だったんです。…こんな風に何も言わずにあいつが消える筈が無い」

そう確信しているようだが、風見は内心、それはどうかと薄く嗤う。

双子だろうと互いの思惑まで透けて見えるわけではあるまい。この若者の一人相撲である可能性だって小さくは無い。

「話はわかりました。ですが、私は当分、山に戻るつもりはありません」

「っどうしてですか！」
「あなたに理由を述べる必要がありますか」
にべもない拒否に、柳瀬は悲壮な顔つきになった。
「お、お願いします！　綾瀬は俺の、大事な兄弟なんです！　本当に何の便りもなしに消える奴じゃない！
俺だけじゃ無理なんです！　力を貸してください！　どうか…お願いします！」
「何か情報があれば知らせる事はしましょう。ですが、私に頼むのは筋違いです。
こうして時間を割いただけでも感謝してほしいくらいですね」
「どうして山に戻ってくれないんですか…！？」
「くどいですね。何を吹き込まれたかは知りませんが、私があるべき場所は自分で選びます。他の誰にも決められる筋合いはありません」
あの方を除いては、と、心の内で続ける。
これで話は終わったと決めつけ、風見はさっさと背を向けた。
「――――どうして人なぞに関わりになられるんです。あんな下等な輩に」
その呟きが聞こえたかのようだった。
「あいつらのせいで全てが狂い出したのに」
柳瀬の声音がどろりと翳をまといつかせるものに変化する。
さきほどの仲間の身を案じるひたむきな態度はがらりと失せ、据わった目は憎悪にぎらついた。

「あの人間のためですか？　俺たちより奴らを選ぶんですか！？」
「…」
「また、人の味方をするんですか！？　どうして！　綾瀬の事だって絶対、あいつらが何かしたに決まってるんだ！
卑怯な小細工ばかりしやがって！　あいつらなんか、人なんか滅びてしまえばいいのに！　風見様だってそう思いませんか！？
本当はそう思っていらっしゃるんでしょう！？」

風見は背を震わせた。

笑っている。
それに気づいた柳瀬は戸惑い――――何を感じ取ったか、みるみるうちに蒼褪めた。

「へぇ、面白い事をおっしゃいますねぇ。私が何を選ぶと？」

嘲弄は凍てついた氷雪の如く。

――――人だアヤカシだと、全く、くだらない。

「そんなもの――――最初からありはしませんよ。
何を妄想しようと勝手ですが、人も天狗も私にはどうでもよい事。
ですが、私のものにまで手を出すならば容赦はしないと、山のお偉方にはそう伝えておくといい」

他者を圧倒する冷笑をまとった相手から放たれる妖気は凄絶だった。魅入られたように若い天狗は声を失う。
到底勝てないと思わせる、それほどまでに強い。人の退治屋に付

き従う行動もさることながら、特別視されるのは彼の内包する力そのものだ。そして、アヤカシは本能で強き者に従う。

———それは生まれて幾らも立たない彼を魅了するのに十分な力を持っていた。

羨望も憧憬もごちゃ混ぜに、柳瀬は彼の姿が消えるまでずっと目を離せず、ただ濁った決心だけを固めた。

14　交差　壱

風見を待つ間、ミツは商店の軒先から町並を見るともなしに観察していた。

日は差して明るい内だというのに、商店も店仕舞いをしている所が目につく。

表で遊ぶ子供たちの声も聞こえず、若い娘の華やかな姿も見当たらない。

深刻そうな顔つきで身を寄せ合って通り過ぎる男たちの姿を目で追いながら、何かあったに違いないと確信する。

ともあれ情報が必要だ。風見の口から出てくる話はいささか視野が偏っている事は否めない。

今後の行動を決めるためにも、判断材料となる歪みのない事実を知りたいと思った。

そんな事をつらつらと考えていた時だ。

ふと、こちらの方角に向かって歩いてくる一組の男たちに気がついた。

気がつくというより強制的に視覚を刺激されたというか、やけに人目を惹く一組だったのだ。

それというのも正面を歩く男たちの背丈が飛び抜けて高い。ミツと頭一つ分は優に違う風見と変わらない上背だ。元々そんなに高く造られていない平屋の屋根と比べてみても、身の丈六尺に及ぶのではないか。

三人目は手前の二人の後ろに隠れてしまっているので、もう少し低いのだろう。

何とも羨ましい、と、ミツは我が身と比べて羨んだ。
小柄な身は利点もあるが、退治屋としては侮られる事も多く、不利も大きかったのだ。

一人は墨染めの着流しの前を大きくはだけ、一見、下層にたむろする博徒どもと変わらぬ有様だった。
が、足取りに目を留めれば、だらしないだけの小者とは身の運び方が違う。おそらく手に持った大刀以上に体術も相当使うに違いない。
着物の上からでもわかる、筋肉が程よくつき、均整の取れた骨格に見惚れてしまう。出来るものなら切実にこの身と交換したい。

顔つきは間違いなく猛獣の類だ。どうやら不機嫌らしい。今にも噛みつきそうな、あの剣呑な顔つきではまず子供が怯えよう。
日に焼けた引き締まった肌に、無造作に切った黒髪が風に吹かれる様は上等な獣の毛並みを思わせた。

もう一人はその男に比べれば幾分細身だが、こちらも腰に太刀を帯びて武装している。
着物の裾を膝までからげた中に下を穿き、たっぷりとした身頃の派手な柄の羽織物を肩に引っ掛けている。どこぞの歌舞伎者かと首を傾げるなりをしているが、整った造作をしているせいか、違和感はあまりない。左目に取りつけられた眼帯もしっくりと馴染むくらいだ。
こちらは対照的に、頭に花が咲いたような軽薄な笑みを満面にし、随分と機嫌が良さそうだ。幅広の布で縛られた髪は肩を滑り落ちて長く波打っており、光の加減で赤みを帯びている。

どちらも年はそう変わらないだろう。少なくとも三十路を越えて

はいない筈だ。

どこぞの荘園にでも雇われた流れの衛士だろうか。しかし、それにしても派手だ。

興味深げに見入っていたが、不意に後ろから声をかけられた。

「店仕舞い？」

話しかけてきた恰幅の良い中年の女は、ミツが軒宿りをしていたこの茶屋を切り盛りする女主人だった。

「まだ日も中天を過ぎたばかりなのに、もう店を閉めるのか？」

「しょうがないからね、この有様じゃあ。ろくに商売になりゃしないよ」

人好きのする顔を憂鬱そうに曇らせ、手を振って通りを示す。

確かに元々少なかった人通りがさらに減ってきているようだ。

何かあったのかと訊くミツに、女は大仰に驚いてみせた。

「やっぱり知らないんじゃないかと思ったよ！　若い娘がこんな所に一人でいるなんて妙に思ってた所さ」

呆れ顔になりつつ、女主人は一昨日にあったというアヤカシ騒動について語ってくれた。

一昨日の日中、堂々とアヤカシが町に出没し、若い女を喰らって逃げたのだという。

姿かたちを聞いてみれば、おそらく雷を操る雷獣ではないかと思われた。そう考えれば、突然、辺りが一面白く染まった次の瞬間にアヤカシが掻き消えたのだという不可思議な現象にも説明がつく。

狼のような四足の獣で、赤黒い毛並みを持つ。体躯はそんなに大きくは無いが、逃げ足が早くて捕らえにくいアヤカシだ。

――――しかし、雷獣は獰猛な見かけによらず、畑の野菜を荒らして食うだけのものだった筈だが…。

しかも一匹ではないのだという。

小物ならいざ知らず、アヤカシが集団で行動するなど聞いた事がない。

「最近、治安も悪くなってきているしねぇ。おちおち出歩けやしない。たちの悪い連中ものさばっているしさ。

あそこにいる連中も性根の腐ったちんぴらどもさ。勝手に世を儚んで好き勝手に振る舞うなんざ迷惑な話だよ」

女は鼻の横に皺をつくって、通りの向こうにたむろしている男たちを睨む。

言われてみれば、昼から呑んだくれているらしい、どうにも人相の良くない男たちだ。

「ずっとあんたの事を見てるよ。あたしが睨みを利かせている内はいいが、気をつけるんだよ。

あんたみたいな別嬪、いつ攫われたっておかしくないんだからさ」

「へ？」

思ってもみない話の向きに気の抜けた声を出すと、女主人はずいと真剣な顔を近づけてきて、ミツは迫力にたじろがされた。

「あんたが何処の世間知らずな姫様だか知らないけどね、まだ自分

が子供だからって油断するんじゃないよ。ろくでもない奴はどこにでもいるんだからね」
「ひめさま？？？」
「何だ、違うのかい？　あんた、さっきまで色男の従者がついていなかったかい？　てっきり、お忍びに出かけた貴族かなんかかと思ってたんだけどね」

こんな下町を見に来るなんて妙な姫様だと思ってたけどさ、と笑われて、周りからはそのように見えていたのかと愕然とする。
「ま、萩の都守（みやもり）様がすぐに手を打たれたって話だから、治安もちょっとはましになると思うんだがねぇ。
アヤカシも、こんな時に腕の良い退治屋がいればいいんだが」
「…人がおらぬのか？」
「あんたみたいな小さい娘は知らないだろうがね、この萩には昔、どんなアヤカシでも退治てくれる滅法強い退治屋がいたのさ。
口先ばかりの連中とは違う、本物のね」

かなりの年だったからもう死んじまっているだろうがね、と続けた女に、自分は果たしてどんな顔をしていたものやら。
ま、なるようになるさ、と明るく背をはたかれ、つんのめりそうになった。

とにかく、アヤカシ討伐のために、天子から都を預かる都守によって、国から派遣される衛士の他に定期的に巡回する自警団が新たに組織されたらしい。
重い腰ばかりの貴族にしては珍しく動きの早い事だ。

いつまでも店仕舞いの邪魔をしていては何なので、ミツはアヤカシが出たという通りを教えてもらうと、そこへ行ってみる事にした。

一昨日の事だというが、何か手掛かりが残っているやも知れない。
…そう思いついたミツの頭からは、別れ様の風見の言葉などすっぽ抜けていた。

危ないと引き留める女主人に用事があるのだと言い訳して、その場を離れる。

アヤカシが出たのは町の中心に程近い通りで、大勢の人間が行き交う最中の凶行だったらしい。
今は日中だというのに人の姿がほとんどない。微かに残る妖気の残滓にミツは目を細めた。

血塗れの娘を口に銜えたまま逃げたアヤカシはそれ以来目撃されていない。
おそらく町の外に逃げたのだと思われるが、アヤカシの気は風に紛れ、後を追うには時間が経ち過ぎていた。

「…何の用じゃ」

じゃりと砂を噛む音に、無表情のままミツは向き直った。
店の女の忠告は正しかった。

思った通り、さきほどから後ろをつけてきていた男たちがにやにや笑いを浮かべ、すぐ背後を取り囲んでいた。

「わしは忙しい。用が無ければさっさと去れ」

怯えるでもない、鬱陶しい蠅を払うが如くのあしらいに、酒臭い男たちは呆気に取られた顔をし、ついでいきり立つ。

「なんじゃ、その態度はぁ！？　生意気な娘め！」

「まぁ、待て待て。小便臭いがきにゃ言ってもわかんねぇだろ。ここは手取り足取り教えてやんねぇと」

「手取り足取りぃ？　そんなの一発殴れば言う事聞くに決まってんだろ」

げらげらと喉を反らして笑う男たちを横目に、ミツは付き合ってられぬと立ち去りかけた。

が、相手がそれを許そう筈も無い。

細い腕を力加減無しにつかまれて、眉間に皺が寄る。

臭い。こやつら、何時から風呂に入っておらぬのか。

「ちょうどあの宿近くだ。そこへ行こうぜ」

「この間もしけ込んだあそこかぁ？　ま、別にいいけどよ」

そのまま意思も問わずに引きずって行こうとする。

勝手に決めるなとはもうミツも言わなかった。無駄な口は開く気もない。

そのまま引かれる力に任せ、くるりと身を翻し、一人の男の急所に容赦なく膝蹴りを見舞った。

「ぐあああぁっ！」

小さな娘に反抗されるとも思っていなかった男はまともに潰された股間を押さえてのたうち回る。

うるさいのですかさず顎を草鞋で踏み付けて、問答無用で黙らせた。

あっという間になされた所業に唖然とする二人をじろりと見ると、ようやく何が起きたか理解した男たちから怒気が噴き上がった。

「このがきぃっ！」

相手は小娘と侮って油断してくれているので喧嘩にもならない。

これくらい術を使うまでもない。。

数分もかからず、三人を地面に這い蹲らせたミツは、きつい灸を据え終えて、手から土を払った。

さて、どんな仕置きをくれてやろうかと算段していた所に、また新手の気配がある。

なんじゃ、まだ仲間でもいたか、と、顔をしかめてそちらを見れば、予期せぬ姿に瞠目した。

「うわぁ、これじゃあ、俺たちの出番は無かったねぇ」

気の抜ける呑気な声の持ち主は、先だって注目していたあの目立つ二人の片割れだった。

間近で見ればますます大きい。

目を丸くして見上げるミツの前で、派手な格好をした眼帯の男はすっと身を屈め、ミツの正面に顔を合わせた。

「訊くのも野暮な気がするけど、娘さん、怪我は無い？」

驚きも覚めやらぬまま黙って頷くと、「それは良かった」と、片目を細めてにっこりと笑いかけられた。

――――これは、もしかせずとも、年相応の娘として気遣われているのか。

娘が怯えぬようにと、男の声音も労わるような柔らかいものだった。

「その、もしかして、助けに来てくれた、のか…？」

恐る恐る確認してみると、あっさり頷かれる。

これまた新鮮な体験だ。

前世、化け物並の扱いを受けていたミツとしては、護るべき対象として自分が認識されるなど思ってもみない。

「こいつらは俺たちが番所に突き出しておくよ。おい、赤也（あかや）」

呼ばれて面倒臭げに近寄ってきたのは、黒の着流しを着た男だ。

赤也というらしい。随分、変わった名だと思う。

赤也は憮然としながらも、文句は言わず、手拭で伸びた男たちを器用に一つに縛っていく。

「俺は青乃（あおの）って言うんだ。娘さんの名は？」

「わしはミツ…」

答えようとして、それは前世の名であった事をはたと思い出す。

「…ル、ミツルという」

咄嗟に出てきた単語は語尾に違う音をつけただけのお粗末なもので、ミツは内心、名をまだ熟考中だと主張する風見を恨んだ。

「ミツルさんか、良い名前だ」

褒めてくれた青乃が浮かべる笑みはへらりと軽い。

浅はかな人物にはみえないが、姿も印象も何を考えているのかつかみどころの無い妙な男といえた。

「おい、嬢ちゃんよ」

「？」

一瞬誰に対しての呼び掛けだと見回したが、自分以外にあるまい。

青乃の隣にふらりと並んだ大男に見下ろされると、何もされずとも威圧感がある。

「まさか、一人でここに来てんじゃねぇだろうな？」

「いや、連れがいるのじゃが、所用で外しておる」

「ならいいが、あんま一人で出歩かねぇ方がいいぞ。こいつらみてぇな奴は何処にでもいるからな」

男の声はざらついて低く、鋭い。

笑みもなく言われれば怒られているのかと思うくらいだが、その言葉は年頃の娘の身を案じるものだ。見かけによらず、気の優しい男であるらしい。

「あぁ、気をつけよう。気を遣ってくれてすまんの」
なかなか見所のある若者じゃなと感心して礼を述べると、横を向いていた赤也が驚いたようにこちらを見、惚けた表情で目を瞬かせた。

そこへ口許に手をあてた青乃が赤也の顔をすかさず覗き込み、にひゃりと意地の悪い笑みを浮かべた。

「今、見惚れた？」
「は！？」
「アカ、今、見惚れてたよね？　だよねっ？」
「はぁ！？　誰が、いつ！？」
「だって、初対面の女の子に怯えられないのってミツルさんが初めてじゃない？
それにミツルさんってお前の理想そのものだろ？　芯のしっかりした美人所で、華奢で小さくてさ」
「俺たちからしてみりゃどんな女だって小せぇだろ！　それにこいつは女じゃねぇ！　子供だ！」
「へぇ、そう言い聞かせてるんだ？　意外と真面目だねぇ」

あのな、と今度は本当に怒り心頭の形相となる赤也をさらりと交わし、青乃はからからと笑う。
長年の付き合いからか気安い間柄なのだろう。場をなごませる空気が自然と笑みを誘った。

「ま、とにかく、こいつが言ったように最近は物騒だからね。ミツルさんも充分気をつけて。
俺たちは大抵、新しく出来た中央の番所にいるから、何かあった

ら来るんだよ」

二人は都守によって組織された件の自警団に雇われているのだという。

今も巡回中で、定期的に町を見回り、治安維持に努めているらしい。

道理で武装していた訳だと納得して、はたとミツはくい付いた。

「もしや此度の人攫いについて調べておるのかっ」

二人は顔を見合わせた。

15　交差　弐（前書き）

視点が少し切り替わります。

15　交差　弐

「もしかして、攫われた娘さんはミツルさんの知り合いかい？」
「いや、そうではないのじゃが…」

渡りに船として何か情報がわかるかもしれない。そんな気持ちが逸ってつい先走ってしまった。

さて、内実はともかく、今の自分のような娘が、綺麗な衣でも甘い菓子でもなくアヤカシに興味を示すなど、普通でない事はわかる。
不審に思われ無闇に嫌疑をかけられるのは避けたいが、焦燥じみた知りたい気持ちは止められなかった。

「わしはアヤカシに興味がある。何故人を襲うのか、その理由が知りたいんじゃ」

それは退治屋として戦い続けてきたミツが長年抱えてきた疑問でもあった。
どうして突然、魔の変革が起こったのか。何がきっかけでアヤカシは変化したのか。

――――そして、今、この東国で何が起こりつつあるのか。

穏やかに問い掛けながらも、青乃は目の前にいる娘の様子を観察

していた。
———風見が連れていたという一人の娘を。
あの天狗が関わっているというだけで、興味をそそる。
純粋な好奇心と、———ひそませた警戒ゆえに。

つい先日、黄京で邂逅を果たした男は、最後に別れたきりの十数年前より全く容色が衰えていなかったという。
それこそかの者の本性。人に酷似した姿を取っているが、いかに似せようとも、その正体は自分たちと異なる時波にたゆたう人外の存在だ。

滅多に変わり身を解く事はなかった男の本性を一度だけ垣間見た事がある。
月影の差す後姿のみであったが、恐ろしく長い真直ぐな黒髪をなびかせ、身の丈ほどの漆黒の羽根を広げたさまは、優れて美しかった。
奇し危(あや)かしと呼ぶに相応しい、妖しいうつくしさとでも言うべきか。

かつて、かの天狗は平然と人の世に紛れ、人の心を暴く事に愉悦を見出していた。
退屈凌ぎでしたよ、と、薄く微笑って言ってのけた天狗の顔を覚えている。

その天狗がとりわけ気に入り、浮名を流すのは決まって花街の女だった。
快楽、悲哀、欲望、愛憎、美醜、人の生が全てそこにあるのだと言い、面白いのだと。

それが見るからに婀娜な女でもない、年端もいかぬ少女をそばに置いていたと知らされて、興味を引かぬ筈がない。
実際、その光景を目の当たりにした赤也などは、ついに見境無く女童(めのわらわ)にまで手を出すようになったかと、呆れ混じりに毒づいていたが。

彼の見解はまた違う。

———あれから短くはない年月が過ぎた。

かの天狗は花街にしばらく入り浸ったその後、忽然と姿を消したと聞く。
根城である御山に帰ったのだろうと察していたが、その天狗が今、この時に人界に舞い戻ってこようとは。

果たして、この邂逅は単なる偶然か———それとも。

「わしはアヤカシに興味がある。何故人を襲うのか、その理由が知りたいんじゃ」

そして———この娘。

妙な娘だ。
アヤカシ好みの整った顔立ちはまだ幼さを残し、咲き誇る前の蕾かと思えば、ところが、戦者(いくさもの)が持つ覚悟がその眼裏(まなうら)に透かしみえる。

つい先刻もそうだった。

目をつけていたならず者たちの動きはあからさまで、うら若い娘に向ける舌なめずりせんばかりの目の色に、不埒な考えはすぐ読め

た。
気配を殺して後を追い、すぐさま助けに入ってもよかったが、そこで青乃は割って入ろうとする赤也を制した。
探りたかったその一端はすぐに知れた。
普通の娘とは思えぬ身のこなしと、体格に勝る男たちを見据えた揺るがぬ眼差し。
名前を聞いた時もそうだが、かの人を彷彿とさせる。
――――世の全てに倦んでいるかのようにみえたあの天狗が唯一執着した、一人の老婆に。
「俺たちもそれは知りたいよ。どうしてアヤカシが突然、人を襲い出したのか。
――――でも、またどうしてそんな事に興味を？　ミツルさんのような女の子が興味を持つ話題としてはかなり物騒だ」
魔の変革以後、東国の民なら誰だって一度は抱く疑問だろうが、少女が口にする響きはどうしてか、もっと深い意図を秘めているような気がした。
そして、その伏せられた真意を知るべきだと青乃の直感は告げる。
浮かべる笑みも口調も気安いものでありながら、青乃は当然のように疑念を口にしてくる。
派手な外見とおどけた笑みで惑わされてしまいがちだが、強面の赤也より、この優男の方が油断ならぬ相手だろう。

どうにも先ほどから探られる視線で肌がちりちりとする。

さて、どう答えるか。

自分の今の素性をどう説明するかだが、ありのままに話しても正気を疑われるだけに違いない。

かと言って、下手な誤魔化しを口にすれば足元を掬われそうだ。

「なに、わしは退治屋をしておるのでな」

むしろ開き直って、にやりと笑んで堂々と告げてやれば、二人は揃ってぽかんとした表情のまま固まった。

何を言われたのかわからないという顔だ。

「…そりゃ、嬢ちゃんなりの冗談か？」

面白くねぇなぁと頭から空笑いをされた。

「信じぬならそれでもよいが。わしは別に嘘はついておらんでな」

むしろしれっと言ってやれば、二人はますます目をまるくする。

「ほ、本当に…？　…いや、でも、あの人も十代で退治屋を始めたって言ってたし、案外、これが普通！？」

「おいおい、あの妖怪じみたクソババァは例外だろ！　ありゃ、人じゃねぇ化けモンだ」

「そうだよねぇ、あの人が例外なんだよね。まぁ、あの人も最初からああだったわけじゃないんだろうけど」

――――…ん？

気のせいか、なんだか妙に癇に障る会話が目の前で展開されている？

「しっかし、こんな若い女の退治屋の噂は聞いた事ねぇけどな」
「うーん、ミツルさんがそう言うならそうなんだろうけど。こんな事で嘘ついてもしょうがないし」

前世でも女だてらに退治屋を名乗っていれば見た目で侮られる事など始終あったが、それにしても。
風見の過保護っぷりもそうだが、今生の自分の姿はそんなに頼りなくみえるのであろうか。
いっそ屈強な男に生まれ変われば良かったものをと憮然となる。

「でもね、ミツルさん、そういう話なら尚の事、ちゃんと約束してもらわないと」

ふと変化した声音に俯けた顔を上げると、真剣な顔をした青乃と目が合った。

「ミツルさんは知らないかなぁ、最近、東国のあちこちで起こっているアヤカシ騒動を」

萩や黄京だけではない。
東国全般に渡り、凶暴化したアヤカシに襲われる事件が起こっているのだという。

「ちょっとね、今までに無い動きをしてるんだよねぇ、アヤカシが。
ここだけの話、他の都では何人か本職の退治師も返り討ちにあってるとか」

その話に、ミツは驚いた。

魔の変革以前にも悪さをするアヤカシがいなかったわけではない。

その辺りは人の性が千差万別あるに同じ、また、人の手によって棲家を追われたアヤカシが報復に出る事もないわけではなかった。

今では退治屋の顔が前面に出ているが、その昔、アヤカシと人の間で調停役を担う事もあったと聞く。

つまり、アヤカシの退治屋は古くから存在し、そのための技も代々継がれてきた。

そう簡単に返り討ちに遭うほど歴史は浅くない筈だった。

「上はどうみているか知らないけど、どうにもこれだけじゃ終わらない気がする。

下手な手出しをすればまずいんじゃないかってね」

――――囁かれる天子の交代。

――――魔の変革の兆し。

――――宙を睨む牛鬼の首。

――――攫われた娘。

幾つかの鍵となる言葉がミツの脳裏に閃いては消えた。

「だからね、ミツルさん、約束してほしいんだ。退治屋として、今回の件に関わらないって」

「しかし、それでは逆にアヤカシに対抗する手が一人でも多く必要なのではないか？」

その反駁に、青乃はふっと表情をくずした。

「あのね、これは俺の個人的な願いだけど、ミツルさんのような若い女の子が危ない目に遭うのを見たくないんだ」
「…」

なんだ、それは。
困ったような眉下げ顔で、そんな風に言われては反論しにくいではないか。
頭から押さえつけられたらどんな事をしても撥ね付けたろうに、年上の男の顔をして心配など。

「…アヤカシが何処へ逃げたかは、わかっておるのか」

結局、話の矛先を変えれば、彼らは難しい表情で首を振った。

「人の目を眩ます術に長けたアヤカシらしくてね。北の森地に逃げたのではないかと言われているけれど、まだ捜索中だよ。
また娘を攫うやもしれないし、ミツルさんも充分に気をつけて」

俺たちに任せておいて、そう言い聞かせて、彼らはならず者たちを引きずって番所に戻っていった。

その後姿を黙ってミツは見送る。
どうやらまだ打つ手を隠しているようだが、出会ったばかりの娘に全ての手の内をさらすほど、彼らも愚かではない。

だが、どうやら血生臭い何かが始まりつつあるという確証は得られたようだ。

理由としてはそれで充分だった。

――――黙って引き下がる事はできんよ。

神にどんな思惑があろうとも、この命、また再び巡るというのならば、自分のしたい事に使わせてもらおう。

１６　同居（前書き）

過去編です。
諸事情で慌てて書いたのでいつも以上に・・・

16　同居

それから一週間が過ぎた。

「あれ、お戻りになられましたぁ？」

外から戻ってみれば、前布で手を拭きながらヨネが炊事場から出てくるところだった。

「ヨネ、いつもすまんな」

「別にこれくらい構いませんよぅ、あたしが好きでやってる事ですもん」

宣言通り、ヨネは日に一度は顔を見せ、食事の支度や家の中の細々とした事に采配を揮ってくれている。

おかげで長く空けていたせいで荒みかけていた屋敷は、人並の様相を取り戻しつつある。

鬼子たちもヨネの屈託の無い人柄に、世話をされる度に居心地悪そうにしていたのが、今では進んで手伝いまで申し出るほどだ。

いつも夕刻前、ミツとすれ違いに里へと戻るヨネであったが、今日に限って顔を合わせるという事は何やら物申したい事があるに他ならない。

炊事場で黙って柄杓で水を飲む老婆に、やはりと言うべきか、ヨネの呼び掛けがあった。

「ミツばっさま、ほんとにあの子たちの事、お願いしますよぅ」

恨めしそうな顔でそう言われ、ミツは片眉を器用にはね上げた。
「なんじゃ、藪から棒に。心配せずとも屋敷から放り出したりはせんよ」
「そんな心配はしていませんよぅ！　だって、ばっさま、ろくにあの子たちと顔を合わせていないじゃないですかぁ」
ヨネの言う通り、屋敷の主である老婆はといえば、日に一度、怪我の具合を診るだけで、ほとんど子らとは接触していなかった。
朝晩の食事さえも別だ。
何をしているかというと、ひたすら外に出て横手の畑の手入れをしている。
朝早くから畑仕事に出掛ける老婆と、養生して部屋からあまり出ない子供たちとでは、同じ屋敷内にいても会う事がないのだ。
事態を見過ごせなかっただけで、別に好き好んで引き取ったわけでもない。
甘えるかたちとなったが、ヨネは子供らの面倒を充分にみてくれており、また、当人たちも人の手を借りるほど幼くはない。
弱った身体が回復すればその内、生まれ育った里に戻るだろうと思っていたミツとしては、必要以上に手を出さずに傍観の構えを取っていた。
「ばっさま、あの子たち、これからどうなるんですかぁ？」
また酷い目に遭ったりしませんよねぇ？と、ヨネが心配顔で訊いてくる。

「身体が元に戻ればその内、郷里にでも帰れようさ。それまでの面倒はみる」

どのような因果で巡り会ったにしろ、これも縁ならば、自分の寝覚めが悪くなるような事はすまい。

そう言い切れば、ヨネがほっとしたように笑った。まったく情の厚い女じゃ、とミツの口許もほころぶ。

「良かった～、それが聞きたかったんですよぅ！　あたしらには無理でも、ミツばっさまなら何とかしてくれるって思ってますからねぇ！」

ばしばしと背中を叩かれ、飲み込んだ水を吐き出しそうになったミツは、力加減をせんか！と怒鳴った。

――――ところが。

「里に戻れぬとな？」

すっかり日も落ちた時分、話があると言い出した三人を前にして、ミツは重く垂れた片瞼をぴくりと引き攣らせた。

「はい。それで、もう少しこちらに置いていただきたいんです」

ミツが仮に「赤いの」と呼ぶ少年が、正面に座った老婆に丁寧に頭を下げる。

サラシナと名乗った年長の少年だ。その頭には、左目ごと白布が巻きつけられ、行灯の光を吸い込んで仄かに赤い。

刃物で抉られたのだろう、左目の傷は酷いものだった。

数日で完治するものではない。今も疼くだろうに、愛想の良いとは言えない視線を寄越す老婆に、少年の顔から微笑みは消えない。

サラシナのすぐ隣には「黒いの」、上品な面立ちでいて多くを語らない寡黙な少年、トナミがきちんと正座をしている。

顔を合わせればいつもミツに食って掛かる「青いの」、ダイラは部屋の端にいたが、話し合いに参加するつもりはないらしく、しかめ面で明後日の方向を眺めていた。

一番小さい銀髪の子、ヤシロは寝間でぐっすり眠っている。

三人とも身体は表向きすっかり良いようにみえるが、それは敵に気取られぬように弱った所を見せない野生の獣と同じだ。

そろそろ奉公に出る年とはいえ、まだ自分の半分も生きておらぬというのに、もう子供と呼ぶ事を躊躇わせる雰囲気を放っている。

それが何処か、痛ましく思えてならない。

「もちろん、置いていただく間、俺たちに出来る事なら何でもしま

す。畑仕事でも炊事でも」

ミツの沈黙をどうとったのか、サラシナは神妙な態度になって口早に続け、老婆は手を振ってそれを追いやった。

「いたいだけおれば良いと言ったのはわしじゃ。別に撤回しようとは思わんよ。

だが、お前たちにとって生まれ故郷の方が過ごしやすかろう。本当に帰らんでよいのか？」

「帰れるものなら帰っています」

残った真紅の瞳に怒りにも似た硬質な光が閃いた。

「このような枷をつけたままで里になど戻れない」

「…」

首枷の呪は完全には解けていない。

端的に言えば、首枷の呪術者とまみえるような事があれば再び虜囚の身となろう。

あえてそれを告げてはいなかったが、彼らは自分たちの状態を正確に把握していた。

「それに、俺たちが戻らなかった時点で里は既に移動していますから」

「…なるほど」

隠れ里として徹底している。

敵に捕縛された時点で、里の存続を脅かすものは子供であろうと切り捨てるか。

「――あなたは…ミツ様は、俺たちの事をご存知なんですね」
子供らしくない、苦さを帯びた複雑な笑みが零れる。
ミツは面白くもなさそうな顔になった。
「お前たち、鬼の一族と呼ばれる者の事か？――それもこちらの人間が勝手に呼んでいる呼び名じゃったな。
正しくは、守地（もりち）と言うたか」
「…そこまで知っておられるんですね」
「ふん、みな人の受け売りじゃ」
感心したように目を瞠るサラシナに、大した事ではないと老婆は言うが、東国に住まう民の大半は知らぬ事だろう。
「それでは俺たちを、匿うという意味もわかっておられる？」
「赤いの、言いたい事があるならはっきりと言え。わしは回りくどいのは好かん」
邪険な態度にサラシナはちょっと目を見開くも、臆した様子もなく、まいったなぁと頭を掻いた。
「ミツ様は本当に全て承知の上なんですねぇ。
俺たちの外見はこの通り、人にない色を持っています。
魔の変革以後、俺たちはアヤカシと等しく扱われ、里の者が殺されそうになったのも一度や二度じゃない。
俺たちを居候させるという事は最悪、アヤカシと通じたに等しい。
里でのあなたの立場を著しく損ねる筈です」
「…」
「ですから、無理にとは言いません。それをお伝えしたかったんで

す」

サラシナの穏やかな眼差し、トナミの静かな表情、ダイラの睨みつける視線が入り混じり合い、何とも言えない沈黙をつくり出す。

———彼らは拒絶されるのを当然と受け入れている。

鬼の一族が忌まれたのは、ただ、外見が異なるというだけではない。人と異なる寿命や優れた身体能力も恐れを生み、強い弾圧を招いた。

だが、その恐れ忌避された彼らは、逆に報復に出るという事も無く、人目に触れず、ひっそりと里に閉じこもって生きる事を選んだ。

その心のありようはどれほど尊いだろうと老婆は思う。

———鬼を鬼たらしめるは人の心。

わずか目を細めて遠い記憶を思い返し、ミツはそっと嘆息した。

「わしはな、美しいと思うぞ。お前の紅も、そっちの小僧の青も、ちびっこいのの銀の髪もな」

「…」

思わず言葉を失った三人が見つめ直した老婆の顔に浮かんでいたのは、優しいと呼び換えてもよい微苦笑で。

だが、あっという間に元の無愛想な顔に戻った老婆は、淡々と続けた。

「何度も言うたが、別にわしは構わん。いぬるも去るも好きにするがいい。最初に言うたが、わしはあまりこの屋敷にはおらんでな。

まぁ、ここしばらくはおるつもりじゃが、その間に何が住み着こうとも別に気にせんよ」

そこで意味深ににやりと笑う老婆。

「！」

と、まさにその時、ダイラの鼻先に、天井からぽたりと何やら落ちる。

「なっ！」

それは手のひらほどの大きさしかない、一つ目の鼠だった。
童鼠（わらしねずみ）と呼ばれる小さなアヤカシで、人が捨てたあばら家などにいつの間にか住み着くだけの、大して害のないアヤカシだ。

ぎょっとするダイラと驚きに一つ目を大きく見開いた童鼠はしばし見つめ合った。

やがて状況を理解した童鼠は飛び上がり、ちょろちょろと部屋の中をいつまでも逃げ惑ったが、すっと手を出したトナミにつまみ上げられる。
無表情の少年に何を考えているか読めない目で見つめられ、きいきいと哀れな声で鳴いた。

「仕方の無い奴じゃなぁ」

苦笑してミツが手を差し出すと、トナミは黙って童鼠を手渡した。
童鼠はミツに気づくと、腕をさっと駆け上り、老婆の首元に擦り寄る。

「クソババァ！　本性を現しやがったな！」

その光景を見たダイラが毛を逆立てて身構えるのに、今度こそミツは呵々（かか）と笑った。

「本性と言われてもなぁ。元々、この屋敷にはアヤカシが巣食っておってな。人が住めるように退治た後も、逃げぬ奴らで害の無いものは放っておるのさ。

ほれ、アヤカシも住み慣れた場所が心地良いのは人と変わらぬらしい」

「た、退治屋にアヤカシが懐くなんて聞いた事ないですよ」

童鼠の慌てぶりが可笑しかったのか、サラシナが笑いを堪える顔で言う。

「アヤカシであろうと、悪さをせぬ相手までわしは退治ようとは思うとらんよ。

ま、そんなわけで、ここに住むのなら、お前たちもこやつらと仲良うする事じゃ」

「はぁ！？　冗談だろ！」

ダイラ一人が蒼褪めて叫んだ。

――――常に一人を選んでいた老婆が何を思って鬼子たちを受け入れたのか、この時、誰も知る事はない。

退治屋と、人と、アヤカシと、鬼と。

ある意味、奇妙な共同生活がそこから始まった。

17　捕獲

翌日、不機嫌な天狗を連れて町を歩き回る少女の姿があった。

「ふむ、ここで良いか」

町と外を隔てる境の一つで、拍手（かしわで）を打って場を清めると、印を切った後に短く呪を唱える。

それから手に持っていた鈴を埋めた。土で捏ね上げただけの変哲もない鈴だが、これは老婆がよく用いた呪具の一つだった。

「ミツ様は無粋な事ばかり興味をお持ちになります」

そう咎めて風見は良い顔をしないが、不承不承ながらも止める事はしなかった。

萩を襲ったアヤカシを退治ると宣言したミツに、必要な呪具をさっさと用意したのもこの男だ。

朝から町の端々を巡り歩いてミツは簡単な鳴子の結界を張っていた。

アヤカシが侵入すれば常人には聞こえぬ音色を響かせるという代物だ。

無論、人外である風見も対象に入ってしまうので、近付くなと厳命している。

「前から思っていたのですが、どうして私にそのアヤカシを退治よと命じないのです？」

「わしがお前にアヤカシ退治を命じた事があったか？」

逆に問い返され、「そういえば一度もありませんね」と、風見は首肯した。

「ずっと不思議だったのに聞きそびれていましたよ。どうしてミツ様は私に命じないのかと」

二人が仕事の相棒だったのは本当だ。

情報収集は元より、多勢のアヤカシに襲い掛かられた時、背中合わせで共闘するのは自然な形だった。

だが、思い返してみれば、退治屋の老婆から不自然なほど、あれをしろ、これをしろと言われた覚えがない。

「私の実力もご存知でしょうに。何か訳がおありでしたか？」

「なに、お前も一応、アヤカシの端くれだと思ってな」

何気なく返された答えに虚を突かれ、振り返らずに先を進む少女の背を風見は注視していた。

この人は何処まで眩しいのだろうか。

彼には全くその気がないとはいえ、同胞を手にかける、そんな点にまで気を回していたとは。

「…敵いませんね、あなたには」

いささか複雑な思いを込めて、そう小さく呟いた天狗の声は少女まで届かず、消えた。

その鳴子の仕掛けが動いたのは、前回と打って変わって人の寝静まる深夜だった。

夜着に着替えていなかったミツは跳ね起きると、方角を見定め、宿から飛び出した。

風見はいない。

月が昇りきる前に届け文に呼び出されて出掛けている。

色めいた逢瀬の誘いかと茶化せばあまりに渋い表情で睨まれたので、どうやら相手は女ではないらしい。何時戻るとも告げずそれきりだ。

当然、ミツは風見を待つつもりはない。

アヤカシに夜も昼も関係ないが、夜目が利かぬのは人。

とうに提灯に入れた火も燃え尽きて、辺りは冴え冴えとした月光のみ、咳(しわぶ)き一つ響きそうなほど暗く静まり返っている。

――――襲う人も見当たらぬのに何故、この時間に。

もしや雷獣とは異なる、別口か。

その可能性も捨て切れない。現時点でアヤカシの動向は全く知れていないのだから。

ただ、今までにない統制された動きに、何者かの作為をひしひしと感じる。

仕掛けの場所に行き着けば、まず感じ取れたのは流されたばかりの鮮やかな血臭だった。

既に誰か襲われた後か。

外の森へと途切れた道の先と逆側に居並んだ平屋へ、ぐるりと視線を走らせたミツは、地面に点々と落ちる黒い血痕に目を留めた。

集落内の道へと続くそれに、迷わず、その後を追う。

密集する家の隙間に逃げ込んだ相手は程なく見つかった。

ある意味予想通りと言うべきか、野犬ほどの大きさの一頭の雷獣が、背から横腹にかけて大きく切り裂かれた太刀傷をさらして力尽きていた。

微かに開かれた赤い瞳は既に黄泉路の先へと濁りかけている。

「どうして、人を襲った」

答えが返らぬ事を知りつつも、ミツはそう静かに問い掛けた。

人の足音にすら怯えて逃げ出すお前たちがどうして。

赤黒い毛に覆われた目元を濡らすのが血だと理解していても、それが零れた涙のように思えてならない。

やがて、雷獣の口からだらりと舌が零れる。止まった息に、ミツはやるせない溜息をつく。

何があったのか、最期の瞬間まで、目の前のアヤカシから伝わってくるものは、どうしようもない恐怖と拒絶だった。

怯えきったまま息絶えた哀れなアヤカシの瞼を、身を屈めて、閉じてやった。

アヤカシの骸は時間をおいて砂へと還る。その前にと、指に霊力を込めた。

骸には特に目立つ異常はない。あからさまな痕跡を残すほど愚かではないらしい。

だが、円を描くように獣の身体を探っていた指に微かな残滓がまつわりつき、短く息を呑む。

黄京でも萩でも、衆目を集め、堂々と騒ぎを起こしていた輩だ。思った通り、雷獣を縛っていた呪は隠されぬまま焼き付いていた。

――しかも覚えがある、この呪の正体は。

身を起こすと、ゆるりと振り返った。

しばらく前からこちらを観察していた存在には気づいていた。相手も隠れる気はさらさらないらしい。

ほのかな月灯りに肩を蒼く染めた青年が、立ち上がったミツに微笑みかける。

「またお会いしましたね」

見覚えのある顔に、つくづく世は狭いと瞠目する。

正面から向かい合うのは、華やかな美貌を持っていないが、透き通る水のような清冽な美しさを持つ青年だった。

以前と変わらず黒髪を一つに結い上げている。

首を傾げるようにして微笑する青年の柔らかな雰囲気と、手に提げたままの白刃は妙に対比をそそった。

黄京ではその白刃を抜く所は見なかったが、今、その刃先は確か

に濡れている。

———雷獣を屠ったのは、こやつか。

動きの捉えにくいこのアヤカシに確実に致命傷を与えたあの一撃。

言われてそう見れば、ミツにとってはほんの少し前の、現実には十数年という歳月が経つ前の、当時の面影もある。

身に付けたものは簡素で、どこぞの屋敷に仕える家人のようだが、月灯りの中では平凡な装いも逆に彼の物静かな気品を際立たせるようだった。

青年は太刀を一つ振ると、腰の鞘に収めて、ミツの前で腰を屈めた。

「お怪我はありませんか、お嬢さん」

昔は寡黙で愛想を何処かへ置き忘れたような少年だったが———随分と変わったものだと思う。

「それは良かった」

首を振ったミツに微笑む姿は、女や子供受けにするに違いないと確信させる誠実そのものの態度だった。

「お前がこの雷獣を斬ったのか？」

「はい」

彼は真面目な表情で一つ頷く。

「これが最後の一頭です。もう襲われる事はありませんよ」
「…」

これで襲撃は二度と起こらないと安心させるように告げられたが、自分の見立てでは事態は到底これで終わらない。
その事に気づいているのか、微笑ばかりが浮かぶ端整な面からは読み取れなかった。

全員かどうかは知らぬが、かつての養い子たちが此度のアヤカシ異聞について関わりがあるのは確かだろう。
ほぼ間違いなく、アヤカシ――――呪をかけた犯人を追っているに違いない。

だとすれば、わざわざ申告せずともミツが知った証など、とうに気づいているだろう。
術の心得のある者ならまず嗅ぎ分けられる類の証左だ。

「…？」
「失礼」

思い巡らす少女の前で、黒髪の青年は気配を感じさせない足取りで歩み寄ると、そのまま腕を伸ばす。

「！」

ぎょっとして固まる少女に構わず、優男に見合わぬ膂力で抱き上げた青年は、そのまま何事も無かったかのように路地から出ようと歩き出した。

「ま、待て！　何故、担ぐ！？」

「竦んで動けなくなっていたのでは？」
「違うわ！　降ろさんか！」
「別に落としませんから、大丈夫ですよ」

悪意も害意も感じられない声音だったが、こちらの意を解さぬ返事をするのは意図的か。
青年は町中へと歩く足を止めない。

触れる手つきも丁寧で、まるで深窓の姫に対するような扱いにもみえるが、決定的に何かが違う。
無造作に抱き上げられたようだったが、身体に回された腕は緩まない。

――――これは、まさか…逃げぬように、か？

目まぐるしく思考が回転するも、それは混乱気味だった。

どうして自分が養い子に拉致されているのか、さっぱり理由が見えない。

――――うーむ、このまま行けば厄介事になりそうな、気がする。

ふと思い出すのは、共に暮らしていた時の事だ。
老婆がアヤカシ退治で無茶をして大怪我を負った際に、静かに深く怒ったかつての少年に凍えるばかりの説教をされた。
思えば、サラシナもダイラも、誰も彼に逆らおうとしなかった。

「そういえばまだ名乗っていませんでしたね。私は黒斗（くろと）と言います。お嬢さんの名を聞いても？」
「…ミツルという」

「やはりそうでしたか。それでは、青乃と赤也をご存知ですね？」
淡く微笑まれるも、ここでその名を聞くとは、驚きすぎてすぐには言葉が出ない。
「彼らからあなたの事は聞いています。今回の事件に興味を持っているお嬢さんがいると」
「その、青乃…殿たちとは知り合い、か？」
「はい、彼らと私は同じ自警団に所属していますから」
穏やかに告げられる事実が妙に衝撃的だ。
という事は、誰も彼も別名を名乗っているが、もしかせずともあの二人も鬼子たちの成長した姿ではないのか。
あの一族の絆を抱える四人が離れ離れに動くなど、あまり想像がつかなかった。
「彼らから頼まれていましてね。あなたが危険な目に遭わぬようにと」
「危険な目になど、わしは遭うておらん」
「えぇ、今回は」
ですが、と、一見、物柔らかな声音は先を紡ぐ。
「お嬢さんはまた事件があれば首を突っ込むつもりでしょう」
「別に誰に迷惑をかけるわけでもなかろう。それに、自分の面倒くらいみられる」
心配される事よりも、今の自分を否定されるような気分になって、不服を覚える。

「そうですね、あなたはやはり普通のお嬢さんではない。――――あの天狗と一緒にいるのですから」

黄京ですれ違ったのだから風見の事を知っていてもおかしくはない。

気のせいか。見下ろした横顔は何も変わらないのに、首筋がちりりと逆立つ。

「何処へ向かっておる？」

「中央の番所です」

着きましたよ、と、声をかけられたのは、ただ一つ、町中で灯りがもれる平屋の前だった。

１８　加速（前書き）

前回の続きです。そして、まだ続きます。

18　加速

ようやく地に降ろされ、つと夜闇に沈んだ通りの先を振り返るも、今宵の襲撃は終わったのか、あれ以来、鳴子の結界が反応する様子はない。

「待て！　雷獣に攫われた娘はどうなった？」

町で聞いた話では、とっくにアヤカシに食い殺されただろうとの見方であったが、生存の可能性は零ではない。

全ての雷獣を退治たと言うなら娘も探し出せたのではと目で問えば、青年はその眼差しを受け止め、静かに首を振った。

「残念ながら」

「…そうか」

迷うやもしれぬな、と、ミツはそっと吐息を落とす。

死に際して、苦痛や恐怖などあまりに強い想念に囚われれば、魂魄は自らの死の在り処すら忘れてしまう。

そして、来世への輪廻へ戻る道を見つけられず、現世と常世の狭間に迷い、何処にも行き場を失くしてしまうのだと。

息のある内に殺されたというなら、それは娘にとっていかほどの苦痛であろう。

「言われる前に言っておくが、わしは手を引かぬぞ」

建物の中から洩れる橙の光が、決意に引き締まる横顔を染めていた。

「ここへ連れてきて何の話があるかは知らんがな。アヤカシを討つ、互いの目的は一致しておる筈じゃ。お前たちの邪魔になるような事はせんよ。
わしの心配は無用と、青乃殿たちには伝えてくれんか」

――――それに。

かつての無愛想な子供の印象を払拭する、微笑を浮かべた青年を頭から爪先までしばらく観察すると、黒斗は少し目を見開いた。

「お前たちこそ無茶をするでないぞ。アヤカシに油断は禁物じゃ」

自分より年下の少女が真剣な顔で口にした忠告に、目を瞠った青年は、ついで小さく噴出した。

「ここで私たちの心配をされるとは思いませんでした」

笑い終えた彼がミツを見下ろす眼差しの色は、先ほどまでと違い、僅かに好奇心を含んで細められる。

「そう、アヤカシ退治に危険はつきものです。お嬢さんはきちんとそれを理解されている。それでもあなたには理由があるのでしょうか」
「理由？」
「お嬢さんが動く理由です」
「それは一口には言えんな」

老婆が半生をかけてアヤカシを退治ていた理由は一つではない。身を護るためでもあったし、他の選択肢はなく、半ば惰性で追い

続けていたと言えばそうかもしれない。
アヤカシに魅入られている。天狗が言い差したように、それが正解なのかもしれない。
だが、この黄京や萩の事件を知って、自身の気持ちは驚くほどはっきり定まっている。
不当に命を奪われる。
その命はミツの身の回りの世話をしてくれたヨネだったかもしれない。あるいは雷獣ではなく、長年顔を合わせてきた天狗だったかもしれない。
そう置き換えてしまえば、我慢がならなかった。そして、それを防ぐための力が自分にあるのなら。
「むざと放ってはおけん。それだけじゃ」
「それだけで、命を危険にさらすと？」
双眸をすっと細められても、ミツは鼻で笑って一蹴した。
「わしがそう簡単にくたばるか。万一、死んだとしてもお前たちには関係の無い事。
言いたかったのはそれだけじゃ。――――わしはもう行く」
「――――」
踵を返して宿に向かって歩き出したミツは気付かない。
誰も寄せ付けず、一人を選んだ老婆の心で吐き出した言葉が、穏やかなばかりだった青年の感情に爪を立てた事など。
――――っ！？

不意に鳴り響いた警鐘に、弾かれるようにミツは振り返った。

――――鳴子がまた。

侵入した方角はさっきと全くの逆方向だ。

それが暗示するものに舌打ちが思わず洩れる。――――まさか、雷獣はただの囮であるのか。

「アヤカシが出たぞ！」

黒斗に向かってそう言い捨てると、ミツは後ろも見ずに再び走り出した。

――――時は遡る。

「じゃあ、そろそろ行こうか」

時刻は丑の刻前、初夏の気配を漂わせた温(ぬる)んだ夜気が入る格子窓の外は、すっかり夜闇の中に沈んでいる。

灯りのついているのもこの番所と呼ぶのもおこがましい、手狭な平屋だけだろう。

夜明け前から働き出す人々の就寝は早い上、戒厳令こそ出ていないものの、先日あった血生臭い事件はまだ記憶に新しく、夜出歩く人間はまずいない。

とりあえずここを使ってくれや、と、気楽に案内された時は、壁が端から崩れかけている有様と累積した埃の厚みに閉口した。

首を回すまでもなく全て見渡せる室内は、木の板を張っただけの長椅子が一つと、壁に捕り物道具が並べられる他は何もない。

番所と銘打ってはいるが、それは名目だけで実質は異なるのだから、仕方の無い話とも言えるのだが。

通常の番所は、喧嘩の仲裁から荷改め、軽犯罪の取締など、昼夜問わずよろず厄介事が持ち込まれる相談請所だ。

真面目に務め上げれば寝る暇もないと言われるほど過酷な役目だが、下級役人の中でも鼻つまみ者が任じられる事が多く、袖の下無しにまともに話の通じる手合いこそ珍しい。

だが、彼ら三人はそんな事の為に都守に雇われたのではなかった。

「赤也と黒斗はいつも通りやっちゃってね。一匹は生かしておいて。――――ま、視てみなくても予測通りだろうけど」

黒地に派手な赤い鷹が筆で描かれた羽織をまとった青乃が物騒な内容を軽やかに言う。

「で、居場所は変わってないんだろうな？」

大刀を握った赤也が目付きを鋭くする。

青乃は首肯して、袖の中から粗末な木櫛を取り出し、手のひらの上に載せた。

残った隻眼でじっと見据えると、ぐにゃりと櫛が曲がり、蛇のようにするすると伸びて土壁を突き抜けていく。

「相変わらず娘のそばにいるようだよ。とっくに逃げたかと思っていたのにねぇ」

一つ握って手を開けば、櫛は元のままそこにある。昨日、黒斗が攫われた娘の親から借り受けた、彼女の愛用する持ち物だ。

遠見の術で気配を探った青乃は、不可解そうに眉をひそめる。指し示されたのは、集落から程近い裏手の森。何かを待ってでもいるのか。それとも動けないのか。逃走する様子も無く、アヤカシの気配はそこに凝っている。

行灯の火を吹き消すと、三人は外に出た。

「ったく、何時までこんな鼬ごっこを続けりゃいいんだ。ちっとも尻尾を出しやがらねぇ。好い加減、うんざりだ」

夜空を仰いで、赤也が苛立ちも露に毒づく。

年と共に驚くほど落ち着いたとはいえ、相変わらず怒りっぽく気が短い男だ。青乃はちらりと横目をくれた。

「俺の予想ではそろそろ動きがある筈だよ。決定的な何かがね」
「何だよ、そりゃ」
「さてね。でも、時期を見計らっている気がする」
数々の襲撃の裏に見え隠れするのは、おそらくは反天子派。天子の次期交代を狙って暗躍しているのは間違いないだろう。
――――この国の先行きなぞどうでも良いが、あの忌々しい呪が絡んだ此度の件だけは見過ごせない。

「そういえば」
事件について思索を廻らせれば、自然、退治屋を名乗っていた印象深い少女の事を思い出す。
昨日のやり取りを思い返して、青乃は記憶を外から眺めるような、様々なものが入り混じる遠い目をして独りごちた。
「…やり方を誤ったかもしれないなぁ」
「何が」
「ミツルさん」
その名前を出せば、赤也は目を見開く。
負けん気の強い娘だ。下手に叱りつけるよりもと、関わらぬように形ばかり可愛らしくお願いしてみたが、どうみても大人しく黙っ

て引いてくれるような娘ではない。
大の大人でさえ震え上がるアヤカシを恐がりもしない。
不審と言えばこれ以上ないくらい怪しい娘である事は間違いないので、煽る意味も込めて色々と鼻先にちらつかせてみたが、さて娘はどう出るか。

面倒事になりそうな予感がするのは気のせいだろうか。

「今晩、ミツルさんに会う事になりそうな気がするなぁ」

先読みの得意な男から出てきた台詞に呆気にとられるも、赤也は笑い飛ばした。

「は？　お前、あんな小せぇ子供がアヤカシを討てると本気で信じてんのかよ」
「ミツルさんってさぁ、名前もそうなんだけど、ミツ婆に似てない？」

それには答えず、青乃が前置きも無く口にした疑問に、三者三様の沈黙がわだかまる。
二人の一歩後ろをひっそりと歩く青年を振り返れば、月を見上げていた彼は目を戻して微笑を浮かべ、しかし、決然と否定した。

「似ているとは思いませんが」
「そう？」
「お前なぁ、何言い出すんだよ。ミツルがクソババァの孫だとでも言いたいのか？」
「うーん、そうかもね」

青乃は誤魔化すように、へらりと笑った。

初対面の印象など幾らでも変わるものだ。あの天狗が何を考えているか読めない点は気になるが、やはり考え過ぎだろうとひとまず思考を閉じる。

「もしミツルさんに会ったらさ、捕まえておいてくれる？」
「捕まえてどうする？」
「彼女の言葉が本当ならいっそ役に立ってもらうのもいいかもね。――でも、俺たちの邪魔になるようなら」

言葉を切った青乃がにっこりと微笑む。
赤也は呆れた顔を隠さなかったが、何も言わなかった。
彼らの関係は主従と呼ぶものではないが、それでも彼の言葉は重みを持つ。長年の付き合いで培われた信頼と呼べるものが確かに彼らを繋いでいた。

「――丁度、薬も切れる頃だ」

一度閉じられた隻眼が開かれた――その瞳の色は滴るほどの――真紅。

大刀を握り直し、不敵に笑う男の双眸も、月光を吸い込んだ湖水以上に蒼い。

その後を静かについていく漆黒の青年。

長い夜はまだ始まったばかりだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7693r/

あやかし鬼譚

2011年5月30日11時53分発行